

藤井・羽鳥他 物語関連文献

藤井聡・羽鳥剛・長谷川大貴・澤崎貴則:交通計画における「物語」の本質的意義,土木計画学研究・講演集, CD-ROM,vol.41, 2010.

藤井 聡:景観改善の「物語」とその「伝染」について,都市計画, 57 (6), pp. 21-24, 2008.

羽鳥 剛史・藤井 聡・住永 哲史:“地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究:インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写,土木技術者実践論文集, 1, pp. 122-136, 2010.

澤崎 貴則・藤井 聡・羽鳥 剛史・長谷川 大貴:「川越まちづくり」の物語描写研究～「蔵のまちなみ」の保存に向けたまちづくり実践～(準備中).

<参考:土木技術者実践論文集 趣意書>

土木工学が土木に関わる諸事業を通じて公益に資するものである以上,それら諸事業を支える構造や土質,水理や計画等の種々の「要素技術」の深化と発展が必要であることは論を俟たない.しかしながら,それら諸事業の成功は,それらの要素技術が個別的に適用されるだけで望めるものでは決してない.それら諸事業が成功し,それを通じて公益の増進が真に図られ得るのは,各種の要素技術を総合化・統合化する「土木技術者」個々人の具体的個別的なる「実践」があった時にのみに限られる.

そうした「土木技術者の実践」の中には,かねて様々な現場にて繰り返し適用されてきた標準的なものが含まれていることは想像に難くはない.しかし,各種の自然的社会的な諸制約が存在する困難な状況において,公益の増進を志す強い意志の下で紡がれた創意工夫に満ちた土木技術者の実践が,様々な形で存在していることもまた間違いない.そうした実践においては,仮にそこで援用されている「要素技術」が標準的なものであったとしても,その「実践の全体像」そのものが「新規」なるものであり,そして,その実践が他に模範となり得るという点において「有益」なるものである.そうした新規性,有用性を鑑みるなら,土木技術者の実践を高い完成度でもって論ずる論文が,新規性と有用性が求められる土木学会論文集に掲載するに足る十分な価値を持つことは何人も否定できぬところであろう.

「土木技術者実践論文集」とはまさに,そうした新規性と有用性を携えた土木技術者の実践を掲載するものとして提案された土木学会論文集の一分冊である.それは,様々な現場において個々の土木技術者によって紡がれた良質の実践を論じた論文を掲載することを通じて,日本内外の現場における土木の実践の質的向上を期し,ひいては公益増進を目指すものである.そしてさらにはそれらを通じて,土木工学の「真の総合工学」としてのさらなる発展に寄与することを目途として提案されたものである.

交通計画における「物語」の本質的意義*

Substantial significance of “narratives” in transportation planning *

藤井聡**・羽鳥剛***・長谷川大貴****・澤崎貴則*****

By Satoshi FUJII**, Tsuyoshi HATORI***, Taiki HASEGAWA****, Takanori SAWASAKI*****

1. 合理的計画論の限界

交通計画を含む公共計画一般において，“合理性”（rationality）は極めて重要視されてきた。

ここに“合理性”とは，“^{ことわり}理”に“合”っている様を言う言葉であり，“論理の法則にかなっていること”（広辞苑）と定義されている。

例えば四段階推計法を代表的なものとするような方法論を用いて“交通量”をより正確に予測し、それを踏まえて合理的に交通網計画をたてるというアプローチが、近現代の交通計画の根幹に位置する考え方であった。これは、交通網の処理能力が、想定される“交通量”に見合ったものでなければならない、という（普遍性を持つ客観的な）“理屈”があり、これに、交通網を“合わせよう”とする、という意味における合理性があったが故であった。

あるいは、公共プロジェクトにおいて費用便益分析が開発され、精緻化され、実務に適用されてきたのも、公共プロジェクトの実施にあたっては、その費用に見合うだけの社会的便益がなければならない、という（普遍性を持つ客観的な）“理屈”があり、この理屈に“合う”ように具体の公共プロジェクトを実施しようとする意味における合理性があったが故なのである。

そして、こうした合理性を金科玉条とする傾きが土木計画学においてあったが故に、“需要予測”と“費用便益分析”が土木計画学において大いに発展せられてきたのだと言うことができよう。

こうした“合理性”を中心概念とする計画論を“**合理的計画論**”（rational planning theory）と呼ぶとするなら、近年、この合理的計画論の枠内では直接的に捉えきれない様々な計画的実践と研究が発展しつつある。

その一例が、交通計画において「まちづくり」を考慮した「交通まちづくり」である。「まちづくり」とい

う行為そのものは、費用便益分析や需要予測なども援用されることもあろうが、それはあくまでも、まちづくり活動の一要素にしか過ぎない。例えば、羽鳥ら（2010）¹⁾において描写したように、「まちづくり」が成功する背景には、様々な人間の知力のみならず情熱や決意、すなわち、“知情意”が決定的に重要な役割を担っていることは間違いない。あるいは、藤井（2008）²⁾において論じたように、様々な“計画技術”を活用するか否かの判断は、そうした計画技術とは独立の、人間同士の思いの共有や通じ合いといった、すこぶる“人間的”な要素に決定的に重要な影響を受ける。

つまり、「まちづくり」の展開そのものは、必ずしも普遍性のある客観的な“理屈”を基準とするものではなく、そうした理屈ではとらえきれない、「人間のある種のダイナミズムや活力」によって突き動かされるものと考えざるを得ないのである。

あるいは、人々の意識や行動の変容を通して諸種の公的問題の緩和、解消を図る「モビリティ・マネジメント（MM）」（藤井・谷口，2008）³⁾の施策展開においても、こうした「人間のある種のダイナミズムや活力」という要素が不可欠なものとして位置づけられる。

ともすると、態度変容、行動変容というキーワードは一見、「態度や行動という客観的・物理的システムが、特定の働きかけで変容する」という、すこぶるシステムティックな現象を意味するものであるかに見える。

しかし、態度や行動というものがあくまでも「人間」に関わる事態を意味するものである以上、それらは「客観的・物理的」なシステムでは決してない。それらはあくまでもその対象概念である「主観的・精神的」なものである。それ故、態度や行動を、さながら「機械をいじくる」かのようにして変容させることは不可能である。態度と行動の変容のためには、最終的には「**納得**」という、客観的、物理的には表現することが不可能な「人間のある種のダイナミズムや活力」に直接関わる主観的、精神的な事態が求められるのである。

ここで、態度や行動を、さながら「機械をいじくる」かのように変容させることができるのなら、MMにおいても“合理的計画論”は大いに役立つことができるだろう。なぜなら、単純な物質のシステムの挙動には、我々人間でも予見できるような普遍的、客観的な法則性

*キーワード：物語的計画論

**正員，工博，京都大学大学院工学研究科

(京都府京都市西京区京都大学桂4 京都大学桂キャンパス C1-2-437, TEL075-383-3238, E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

***正員，工博，東京工業大学大学院理工学研究科

(東京都目黒区大岡山 2-12-1 MI-11,

TEL03-5734-2577, E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp)

****学生員，京都大学大学院工学研究科（連絡先は**と同様）

*****学生員，京都大学大学院工学研究科（連絡先は**と同様）

(物理)があり、その法則性を知ってさえすれば、特定の変容を導く働きかけは容易に、かつ“合理的”に定位できるからである。ところが、如何に心理学が発展したとしても、物理学の発展に伴って客観的物理的なシステムの挙動を予見可能になった程度には、主観的、精神的な態度や行動を予見できることはあり得ない。

かくして、MMIにおいても、交通まちづくりにおいてと同様に、“合理的計画論”の有効性が大いに失効してしまわざるを得ないのである¹⁾。

2. 全てのプランニングにおいて見られる“非合理性”

以上、交通まちづくりやモビリティ・マネジメントにおいては合理的計画論の有効性が低く、“非合理的”な側面が“積極的”に求められているという点を指摘した。しかし、“非合理性”を積極的に求めているのは、これらの取り組みだけではなく、よくよく考えてみれば、“合理的計画行為”を含む全ての“計画行為”(プランニング)が、“非合理性”を積極的に必要としているのである。

例えば、「交通需要予測をして、交通計画を立案する」という行為そのものは、合理的計画行為である。

しかし、「交通需要予測をして、交通計画を立案しよう」と考えることそれ事態を、合理的に説明することは難しい。交通計画のために交通需要予測をするかしないかは別の次元の判断であるし、実施したとしても、計画策定においてそれをどの程度考慮するかの“さじ加減”も合理的に説明することは難しいからだ。

さらには、交通計画時に通常策定される「上位構想」でうたわれる“豊かな地域の実現”や“安心・安全な暮らしの実現”と言うようなビジョンにいたっては、なぜそうなったのかを合理的に説明することはさらに難しい。

そしてそもそも「交通計画を立案しよう」と思い立つこと自体を、合理的に説明することもできない。交通計画を立てていない自治体は世の中にいくらでもあるし、策定した自治体においても、それをどのタイミングで、どのくらいの頻度で見直すのかも、合理的に説明す

ることは難しいのである。

要するに、この例からも明らかな様に、計画の具体的な中身の詳細な検討においては“合理性”は重視されることがしばしばあったとしても、計画行為、あるいは、プランニングという行為全般においては、“合理性”は、“一要素”にしか過ぎないのである。そして、“合理性”とは全く異なる“原理”で、プランニングが進められているのである。

3. プランニングの実相

ここまでの議論は、単に「合理性以外の計画原理が存在しており、それが、現実のプランニングを推進する重要な原動力となっているのだ」ということを主張したに過ぎずそれが何であるのかを明確には論じてはいない。

では、“合理性とは異なる計画原理”とは何なのか？

この問題を考えるにあたり、その計画原理によって推進される“プランニング”とは一体どのような行為であるのかについて図1を用いて簡単に振り返っておこう。

この図は、藤井(2008)⁴⁾で動的な計画であるプランニングと、そのアウトプットとして策定される静的な計画であるプランとをそれぞれ概説するために用いられたものである。まず、図上部の太い実線が、自然・社会状況であり、これは交通計画で言うなら交通量であったり混雑の状況であったりする。その一方で、その下に書かれた点線は、「思考・議論過程」あるいは「意志・精神活動」を意味しており、これが、「プランニング」と呼ばれる行為そのものを意味している。

ここに、「プランニング」は、どのようにすればより良い社会に資するような状態へと改変できるかを持続的に考える、という「思考過程」を意味するものである。もちろん、複数人がこのプランニングに関与している場合には、その過程は思考過程というよりは「議論過程」と呼称した方が適切であるとも言える。また別の言葉で言うならば、プランニングとは、より良い社会の実現を志す「意志の流れ」あるいは「精神の流れ」そのものと言うことができる。そして、上記のように、複数人を想定するならば、良い社会の実現を目指した「集合意志の流

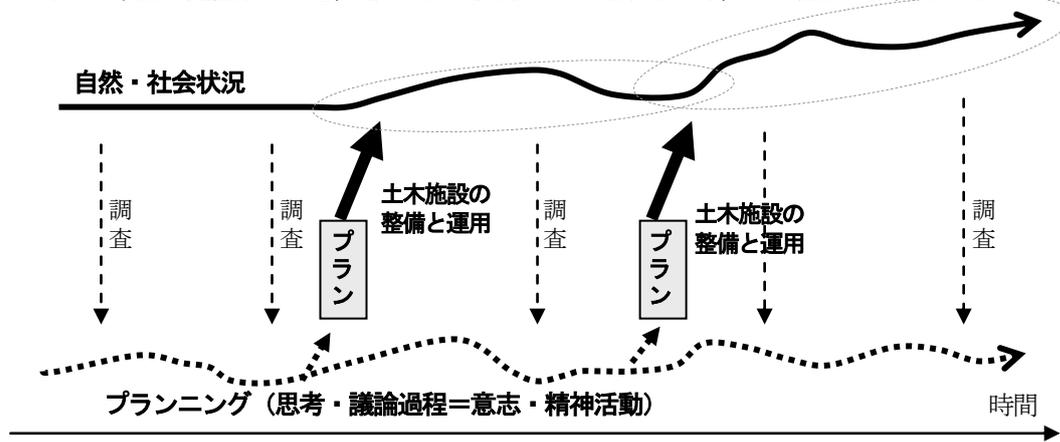


図1 プランニング行為の概念図

藤井(2008)より

れ」，あるいは，「集約的精神の流れ」，と呼称することができる。交通計画で言うなら，交通計画を担う行政セクションや，それを事務局とする持続的な委員会，さらに言うなら，それらに関わり続ける，行政官，学識経験者やコンサルタントから構成される，“プランナー”としての“専門家集団”が，持続的に共有し続ける“思い”や“持続的な議論”と言うこともできる。

ただし，この“思い”や“持続的議論”が明確に存在している場合もあれば，ほとんど希薄な場合もある。この図のイメージを援用するなら，前者の場合はその点線を太く，かつ，濃厚な色で記述することができるだろうし，後者の場合は，細く，消えて無くなりそうな程に薄い色で記述することもできるだろう。

あるいは，異なる人々や集団が，思いや議論を一にせず，あちこちを向きながらバラバラに計画行為に関わっている場合には，その点線を平行して，それぞれの思いの強さや議論の熟度に応じて別々の太さと濃さで記述することもできるだろう。

さて，こうした思考や意志の流れである「プランニング」が，現実の世界に働きかけるには，一度具体の「プラン」を策定することが必要となる。そのために，図1に示したように，プランニングから意志の流れが枝分かれして「プラン」が策定されるのである。そして，その「プラン」に基づいて様々な形で，現実の世界である自然・社会状況に具体的な働きかけが為されるのである。例えば，具体的交通流円滑化計画が策定され，その計画に基づいて，様々な交差点改良やTDM施策，MM施策が展開されていくのである。

なお，こうした一連のプランニングを織りなすプランナーが誠実にそのプランニングに携わっているのなら，こうした具体のプランを策定し，実行するだけではなく，それが功を奏したのか，それとも失敗に終わったのか，気がかりで仕方なくなるだろう。かくして，彼らは，「調査」を行うのである。

そして，その調査の結果を踏まえて，彼らは再び様々な議論を展開し，思いを重ね合わせながら，様々な戦略を練っていく。そして一定期間を経た後に，そうした諸戦略を，再び具体的な“プラン”にまとめあげる。

こうして，彼らは，プランを策定し（Plan），それを実施し（Do），調査し（See，あるいは，Check & Action），再びその結果を踏まえてプランを策定し——，ということを，半永久的に繰り返していく。つまり，プランニングという行為は，原理的に，こうしたPDCAのマネジメントサイクルのかたちを採らざるを得ないのである。

さて，こうしたマネジメント・サイクルに基づくプランニングの推進は，哲学的には，ジョン・デューイやウィリアム・ジェームスの「プラグマティズム」（実用

主義）の理念に基づく実践論そのものである。

ここにプラグマティズムとは，「事象に即して具体的に考える立場」を意味するものであり，「観念の意味と真理性は，それを行動に移した結果の有効性いかんによって明らかにされる」という立場である。言い替えるなら，この現実世界の実践的行為の中にこそ，真理が宿ると考えるのがプラグマティズムなのである。

このことはすなわち，現実世界や実践行為の「外側」に具体的な理論や理屈を想定し，それに，現実世界や実践行為を合わせようとする「合理主義」の対極にある哲学的立場なのである。

4. プランのための合理性

プランニングのための物語性

さて，こうしたプランニングの構造を想定すると，「合理性」という計画原理がどこで必要とされているかが，明らかになる。先にも指摘したように，プラグマティズムの立場から演繹されるように，「プランニング」の本流のプロセスそのものにおいては，合理性はその有効性を持たない。しかし，実世界に働きかけるための道具である「プラン」を策定する段に，プランニングから「枝分かれ」した「支流」部分においては，合理性は極めて重要な役割を担うこととなる。

なぜなら，その「プラン」が働きかけようとする「客観的世界」（自然・社会状況）には，一定の「法則性」であるところの「理」が存在するからである。交通流には交通流についての法則性がある，交通需要にも一定の法則性がある，費用や便益においても一定の法則性がある，さらには，態度変容や行動変容においてすら，心理学を援用しさえすれば一定の法則性を見いだすことができる。

だからこそ，「客観的世界」に働きかけるためには，その「世界」の「理」である法則性を十二分に理解し，それに「合致」するための合理性が，好むと好まざるとに関わらず求められているのである。

その意味に於いて，「プラン」には，少なくとも一定水準以上の合理性が不可欠なのである。

これが，「土木計画学」を含めた公共計画論の全てが，合理性を重視してきた本質的意義なのである²。

ところが，純粹に精神的，思考的な過程である「プランニング」には，普遍的，客観的な法則性は必ずしも存在していない。それは時間的には歴史や伝統，空間的にはその地の文化，社会的には周辺の人々に影響を受けるばかりか，短期的には気分や雰囲気によらず流されてしまうものでもある。さらには，思想や信条やイデオロギー，ひいては信仰や宗教にすら，多大な影響を受けるものでもある。

それが，精神現象なのであり，その動きを予見可能

表1 物語的計画論が貢献しうる諸課題

「基本構想」の策定	諸計画の上位概念として措定される「基本構想」において「物語」は重大な役割を担う。
「まちづくり」の推進	多くの公衆の参画を前提とするまちづくりにおいて、そのまちの歴史、そしてその歴史の一翼を担う「まちづくり史」は「物語」そのものである。
「地域愛着」「ナショナリズム」に関する処方箋	住民、国民の合意の下で推進する都市計画や国土計画において一人一人の地域愛着やナショナリズムは極めて重要な要素である一方、それらは地域や国家に関わる「物語」と大きく関わる。
政策の普及	LRTやMM等の新しい施策の社会的普及において、それにまつわる「物語性」は大きな役割を担う。等

にするほどの法則性は、少なくとも現実の世界に住む我々にとっては存在しないものなのである⁶⁾。

ところで、もしも“学”というものが、物理学をその代表とする「法則性を見いだす」という種類の知的行為にのみ、措定しうるものであるとするなら、こうした“精神”に関わる“プランニング”の“学”を措定することは不可能である、ということになる。

しかし、法則性を見いだすという物理学的方法論のみが、“学”が“学”たるために必要な要素ではない。

人間の精神において生ずる納得、感動、熱意、情熱といった、近代の心理学ですら法則化することが著しく困難、あるいは、不能な諸現象をそのまま取り扱う方法論として、例えばキリスト教神学を源流とする西洋の「解釈学」や、日本の庶民信仰に深く関わる日本の「民俗学」等の「人文科学」が存在しているのである。

そして、そうした解釈学や民俗学においてとりわけ重視されている中心的な概念こそ「物語性」である。

つまり、客観的な世界に深く関わろうとするプランにおいては、その客観的な世界の理＝法則性を思考する「合理性」が重視される一方、精神的な現象である「プランニング」においては、プランニングの過程で生ずる様々な人間の精神、ひいては、人間の生命（レーベン）に関わる「物語性」が重要な役割を担うのである。

4. 物語的計画論の構築に向けて

以上、合理的計画論の限界を指摘すると共に、その限界が、とりわけ、「プランニング」という精神活動に関わる部分に於いてより顕著であるという点を踏まえ、精神に関わる“学”としての解釈学や民俗学において重視される「物語性」こそが、合理性とは全く異なる新しい計画原理である可能性を指摘した。

ここに「物語」とは、例えば、アーサー・ダント(1989)⁵⁾が指摘するように、ある人間的現象を「行為から原因を探る因果律」で説明しようとするテキストではなく、人間的現象を、「ある人がある行為をしました。その結果帰結をもたらしました」という形で、ある行為がある帰結をもたらしたという「解釈」を提示する

テキストなのである。つまり、物語は「解釈」の集積として提示されるものである。

だからこそ、その解釈の集積としての物語に、著者は「人間の意志」や「精神」を指し示さんとすることが可能となり、読者においてはそれらを読み取らんとすることが可能となる。

例えば、シュライエルマッハーが『解釈学の構想』⁶⁾で述べたように、そうした著者と読者の間の物語というテキストを介した「共同作業」が可能となり、それを通じて、様々な「思い」が、読者に伝わることとなるのである。あるいは、ディルタイが『解釈学の成立』⁷⁾で指摘しているように、物語文を通して読者は、著者の心理状態に自己移入し、その生き様を追体験・追構成することを通じて著者の「意図と精神の有りよう」を理解することが可能となるのである。

それ故、こうした「物語」を中心とした計画論、すなわち、「物語的計画論」(narrative planning theory)は、表1のような意味を持つ可能性を秘めているのである。

今、公共計画が様々な現場で頓挫しているとするなら、その本質的原因は、この物語的計画論、あるいは“物語”に対する理解不足が公共計画論においてあったからではなかろうか。もしそうであるなら、物語的計画論の構想こそが、今日の計画学における、喫緊の課題であるに違いないのである。

脚注

- [1] この意味に於いて、MM、あるいはそれを含む「態度変容型交通計画論⁸⁾」は、本稿で論ずる合理的計画論とは異なる“物語的計画論”への展開の端緒として論じたものとして位置づけられる。
- [2] ただし、賢明な読者であるなら既にお気づきのところであろうと思われるが、その「世界」の中ですら、我々“凡人”には、その“理”が拿捕しきれない対象がある。それが、人間であり、ひいては一人一人の“心”である。無論、“心理学”を援用すれば、心の動きの方向性を一定程度は拿捕することができるが、それはあくまでも一定程度にしか過ぎない。したがって、“態度変容型計画論”においては、そのプラン策定においてすら、合理性の有効性は一定水準に留まることとなる。しかし逆に言うなら、繰り返しとなるが、そんな“心”ですら、心理学を援用すれば、一定程度、その法則性を拿捕することが可能となるのであるから、その意味に於いて、“態度変容型計画論”においてすら、合理性は重要な一要素となるのである。
- [3] あるとするなら、それは全知全能の“絶対神”くらいしか、理論上(あるいは、神学上)存在しえないだろう。

参考文献

- 1) 羽鳥 剛史・藤井 聡・住永 哲史：“地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究：インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写，土木技術者実践論文集，Vol.1, pp. 122-136, 2010.
- 2) 藤井 聡：景観改善の「物語」とその「伝染」について，都市計画，57(6), pp. 21-24, 2008.
- 3) 藤井 聡・谷口 綾子：モビリティ・マネジメント入門，学芸出版社，2008.
- 4) 藤井 聡：土木計画学～公共選択の社会科学～，学芸出版社，2008.
- 5) ダント，A.C.(著)，河本 英夫(訳)：物語としての歴史：歴史の分析哲学，国文社，1989.
- 6) シュライエルマッハー，F.D.E.(著)，久野 昭・天野雅郎(訳)：解釈学の構想，以文社，1984.
- 7) ディルタイ，W.(著)，久野 昭(訳)：解釈学の成立，以文社，1981.
- 8) 藤井 聡：交通計画のための態度・行動変容研究－基礎的技術と実務的展望－，土木学会論文集，No. 737/IV-60, pp. 13-26, 2003.

景観改善の「物語」とその「伝染」について

Narratives on improvement of landscapes and its Infection

Technology of design should be utilized by residents in an urban area for the actual improvement of urban landscapes, though the technology looks excellent. With this recognition, the conditions that design technology could be sufficiently and efficiently utilized by urban residents were discussed in this paper. The discussed conditions include existence of residents' will to improve the landscape, narratives making of the process of improvement of urban landscapes due to residents efforts, and infections of will to improve the landscapes by means of the narratives.

藤井 聡

東京工業大学大学院理工学研究科・教授

Professor, Department of Civil and Environmental Engineering, Tokyo Institute of Technology

「まちの意志」がもたらす「景観改善」

「都市景観」は、一面においてデザイン技術の問題であるが、そうした側面でのみ都市景観を捉える視点は、極めて表層的なものの見方にしか過ぎない。

いかに素晴らしいデザイン技術がこの世に存在していようとも、そうした技術を活用しようとするヒトや組織が無ければ、その技術が現実の世でかたちとなることは無い。さらには、そうした技術を活用したくても、諸種の社会的、政治的要因故に、活用することが現実的に困難な状況であるならば、同じく、その技術がかたちを得ることはない。

その一方で、ある「まち」のヒトや組織が、実質的に自らのまちの景観を改善するデザイン技術を一切所持していなかったとしても、都市景観にも繋がり得る、そのまちそのものを改善しようとする十分な意志と、その意志を貫徹せしめる十分な政治的、社会的戦略性を所持しているのなら、都市景観は確実に改善されていくことは間違いない。なぜなら、彼ら自身がデザイン技術を携えていなくとも、どこかからデザイン技術を携えた技術者を呼んできて仕事をさせることもできるだろうし、相応しい技術者がどこに居るのかの知識が不在であっても、あれこれと尋ね歩くことで、適切な技術者に巡り会うこともあろう。そしてよしんば非常に優れたデザイン技術者に出会えなかったとしても、彼らは自らの街路景観を抜本的に“改善”していくことができるであろう。なぜなら、街路景観とは、あらゆる要素から構成されているのであり、その多くが、そこに住まい、働き、憩う人々の手で左右されるものだからである。彼らは、景観改善などに頓着しないまちの住人とは異なり、ゴミを捨てないだろうし、こまめに掃除をすることだろう。品位無き看板やのぼりを出すことは無いだろう。適切な場所があれば、花を植えることもあるだろうし、植樹の手入れも怠らないだろう。収入の幾ばくかを割いて、街路景観全体への調和を意識しつつ、

壁や塀に色を塗ることもできるかもしれないし、もっとお金があれば、壁や塀の素材を変えていくこともできるだろう。

無論、色を変えたり、素材を変えたりするようなそうした取り組みは、素人にはできないものであることを、彼らは知っているに違いない。だからこそ、彼らは、そうした技術を持つ人々を探ることだろう。そして、そうした技術者に巡り会ったとしても、彼らはその技術者の提案を鵜呑みにするようなことは決して無いだろう。なぜなら、彼らはそのまちを愛し、そのまちの景観を改善したいと願う人々なのであるから、どこの馬の骨とも分からぬような、場合によっては金儲けのためだけにここに来ているかも知れないような輩の言うことを鵜呑みにすることなどあり得ないのである。そして、彼らは、外様のそうした技術者をなかなか信用しないかもしれないが、もしもその技術者が良い仕事をしたのなら、彼らは、その技術者を信用していくこととなるだろう。そして、徐々にその技術者とまちの人々との間の信頼関係は築き上げられていくことであろう。そうなれば、まちの人々とその技術者との間に意見の対立が生じたとしても、「この方がおっしゃるのだから、そうした方がいいのかも知れない」という方向で合意が得られることもあるだろう。

かくして、素晴らしいデザインの技術がもし不在であったとしても、まちをよくしようと考える意志さえそのまちにあるのなら、まちの景観は、大きく改善しうるのである（藤井，2007）。すなわち、都市景観の改善の議論において何よりも重要なのは、それぞれのまちそのものの意志の強さなのであり、その意志をもたらず根源としての“まちの活力”そのものなのである。

良質な「風景」と「デザイン技術」の生成

そして、そうした景観改善の営為を、そのまちが何十年、何百年、そして千年を越える長きにわたって繰り返すことができるのなら、その地に訪れた異郷の人間が生涯忘れ得ぬ程の感嘆を覚えるほどの、「素晴らしい」という言葉で表現することが^{はばか}られるような素晴らしい風景とたたずまいが現出することとなるだろう。これこそ、全ての都市景観に関わる人々が最も敬意を表すべき景観なのであり、風景である。それ以上に素晴らしい「デザイン」など、この世に存在するはずもない。なぜなら、その風景は、その地に住まう人々の何十年、何百年以上にも及ぶ営みがあってはじめて構成されたものなのであり、誰かが頭の中で思い付きのように考え出したアイディアでもって“デザイン”したものなのでは決してあり得ないからである。

むしろ、そうした人々の営みの中から、真に良質な「デザイン技術」なるものが立ち現れてくるに違いない。先に述べたような、まちの人々からの信頼を集めた技術者が、そのまちの改善のために日夜努力することを通じて徐々に形作られていくのが、デザイン技術と呼ばれるものなのである。すなわち、「デザイン技術が風景を生み出す」のではなく、よきまちを目指す種々の営為の中から生み出されるものが「デザイン技術」なのである。

「デザイン技術」の重大な役割

ただし、全てのまちが、そうした長い歴史と伝統を持っているとは限らないのも事実である。むしろ、デザイン技術を生み出す程の歴史と伝統を持っているまちは、この現代社会の中では極めて限定的なのだとわざとを言わざるを得ない。まちの改善を目指す人々が急に立ち現れ、自らのまちの改善を目指す運動を、今、まさに始めた、というまちはこれまでも数多くあっただろうし、これからも数多く現れることであろう。

繰り返しとなるが、こうした時に必要なのはやはり、そのまちの景観を、ひいては、そのまちそのものを改善していこうとする「まちの意志の強さ」であることは論を俟たない。彼らはまず、自らの手が届く範囲でできることを、一つ一つ行い、積み重ねていく以外になすべきことは無い。しかし、そうした、自律的な活動、いわば、「景観まちづくり」とも呼ばれる活動が続けるにあたって、他のまちや地域の伝統的歴史的な景観改善活動の中で生み出された「デザイン技術」を「活用」することができることは、極めて重大な意味を持っている。そうした他の土地でつくられたデザイン技術を活用することによって、そのまちは、回り道をせずとも効果的、効率的に景観を改善していくことが可能となるからである。

そして重要な点は、先にも指摘したように、健全なるかたちで景観改善を進めようとしているまちの人々は、そうした「外様のデザイン技術」を決して容易には信用しない、という点である。自らのまちのことをよくよく考え、そのまちにとって如何なるデザインが必要なのかを考え続けている人々にとって、単なるコンセプトは、机上の空論にしか見えぬものであるに違いない。しかし、そのデザイン技術が、真にそのまちの景観改善に資するものであるのなら、彼らは必ずや、その技術の重要性に思いが至り、さながらスポンジが水を吸収していくように、そのデザイン技術をそのまちに取り入れていくこととなるろう。

「デザイン技術」の運用上の課題

デザイン技術の運用を考える上で、ここが一番難しいところであろう。このように、あくまでも「まち」が主体であり、特定のデザイン技術を当該の「まち」が「活用」という関係が、理想とするまちづくりとデザイン技術との関係であるに違いない。しかし、必ずしもそうした理想通りには事が進まないのである。

第一の失敗は、「まち」側にある。まず、その「まち」に景観を改善しようとする意志が不在であれば、論外である。どんなに素晴らしいデザイン技術を紹介しても、それはいわゆる「ネコに小判」とならざるを得ない。この点は、今まで繰り返し論じた通りである。しかし、より深刻な問題は、「まちを改善しようとする意志は幾ばくか存在しているが、まちの改善を、それほど強くは念じていない」というようなケースである。こういうケース

は、様々な要因で生じうる。行政の中で景観改善を進めてきた熱心な担当者がいたが、それを引き継いだ後任が、景観改善についてはさしてやる気が無いが、仕事を引き継いだので何かやらないといけない、というような場合に生じうる。あるいは、景観改善をからめれば補助金がでるので応募しようか、というような商店街の場合にも、こういうケースは生じうる。こうしたケースにおいては、本来主体であるはずの「まち」側はさして強い「意志」を持たず、確たる主体性が存在していない。こういう場合、当該のデザイン技術が、当該のまちに相応しいか相応しくないかの判断が十二分になされないままに、当該のまちに適用されてしまう、というような残念なケースがしばしば起こりうるであろう。無論、技術者側は、そうならないように、入念に当該地域の状況を勘案し、可能な限り当該の地域に相応しい形で当該のデザイン技術を適用しようとするものもあるのだろうが、その地に住み、その地のことを熟知しているとは必ずしも言えない技術者に、その地に最も相応しい形でデザイン技術を適用できるとは必ずしも限らない。

第二の失敗は、「技術者側」の問題である。上述のように、技術の適用・転用において何よりもまず重要なことは、「当該技術を活用する“まち”側に主体性があることを理想とする」と考えることである。この感覚が不在のデザイン技術者は、その地の歴史や伝統、風土を一切顧みず、のべつまくなく、自らの好むデザイン技術を適用したがることとなる。言うまでもなく、こうしたデザイン技術の適用行為は、当該の技術者の主観的な満足感を（そして言うまでもなく、多くの場合、経済的な収益を）向上せしめるであろうが、それが当該のまちの景観にとって必ずしもプラスとなるとは限らない。場合によっては、そうしたデザイン行為が、当該の景観、風景、風土に、「破壊的」な影響を及ぼすことともなる。

かくして、都市景観の実質的な改善にとって、「デザイン技術」は諸刃の剣なのである。上手に使いこなすことができるのなら、極めて効率的、効果的に、当該の景観を改善せしめることが可能となる一方で、技術者とまちの人々との間の関係が必ずしも適切なものでなければ、景観改善を期することができなくなるばかりか、場合によっては、“景観劣化”を導きうるものでもあるのである。

「デザイン技術」の適切な運用に向けて

言うまでも無いが、こうした「技術」と「まち」との関係は景観に限らず、あらゆる局面において生ずるものである。例えば、「交通まちづくり」と呼ばれるまちづくり活動では、交通に関わる各種の「技術」、例えば、バス運用技術、LRT運用技術、財源獲得に関する技術、そして、モビリティ・マネジメントと呼ばれるコミュニケーション施策に関する諸技術が存在しているものの、それらの技術を「上手に使いこなす」ことができなければ、その「まち」が「改善」されることはない。

さらにより普遍的に言うならば、「技術」と「人」の間には、こうした緊張関係が常に存

在している。そもそも技術とは、人や社会の有り様のごく一部を、効率的に、特定の方向に改善せしめるものにしか過ぎないものである。しかし、そうしたごく一部を効率的に改善したからといって、人や社会そのものが改善する事などあり得ない。人や社会という存在は、様々な要素が有機的に絡み合いつつ動的に変化する高度に複雑な現象を謂うのであり、そうした複雑な現象の全体が、たかだかいくつかの要素を変化させたところで、改善されるということなど原理的にあり得ない。だからこそ、技術を活用する者は、それが如何なる技術であったとしても、その技術を適用する人や社会の“全体像”を見据えつつ、あくまでもその“全体”を改善するために、その技術を“活用”するのだ、という形で、「技術を上手に使いこなす」ことが不可欠なのである。

しかし、繰り返しとなるが、そうした「技術の活用」がなされて行くとは限らない。その問題について、どの様に対処していくべきか——。この点については、心ある技術者・デザイナー、そして、まちの景観を様々な形で担っている多様な人々が、あらゆる場面を通じて様々なコミュニケーションに多面的に参加していく以外にはあり得ないのだろうと思う。

景観改善の「物語」と「伝染」

例えば、あるまちに、自らのまちの景観の改善に向けた多面的な努力を行い、素晴らしい成果を上げた人々がいたとしよう。もしも、こうした人々の取り組みが一切他のまちに伝わっていなかったとしたら、彼らの取り組みは、彼らのまちの改善をもたらすだけで終わることとなる。しかし、そうした人々の取り組みが、他のまちの人々に伝わったとしたら、その時、一体何が起こるだろうか。

無論、自らのまちの景観の改善に全く関心の無い人々の耳に、その話しが伝わったとしても、何も起きはしない。しかし、多くの人々がそうであるように、自らのまちに幾ばくかの関心を持つ人々の心にその話が伝われば、その人達の心が「動く」ことはあり得るだろう。

ただし、その話が、単なる味気ない情報・インフォメーションであったなら、よほど景観に興味関心を抱く人々を除いて、心が動かされるようなことはない。多くの人々の心が動かされるのは、その話が「**物語**」として語られている時のみに限られる。言い換えるなら、あるまちの景観改善の経緯が、単なる味気ない年表で紹介されるのではなく、「**物語性**」を帯びた形で語られる時、多くの人々の心が「動く」のである。

こうして心を動かされた人々の中には、ただ単にその場面で心が動き、ある種の束の間の「感動」を覚えただけで、再び、自らの日常に埋没していく人々がいることは間違いない。しかし、全員が全員、その「感動」を瞬間に消費してしまい、その「感動」の前後で何ら差異が生じていない、という様な、ニヒリスティックな者なのでは決してない。少なからずの人々が、その「感動」を契機として、実際に、何かを始めることが起こりうるの

である。例えば、あるまちの景観改善の成功の物語に触れた人の内の幾人かは、その物語で語られているような成功物語を、わがまちで実現するためには何ができるのだろうかと考え始める。そうした人々の一部は、景観デザインの勉強を始めるかもしれないし、そういう技術者を探し求めるかもしれないし、そのために必要な財源を集める努力をするかもしれない。あるいはそれらが全て難しくとも、少なくとも自らの感動を他者に語り、共感を得ることができそうな仲間を増やし、語らいを始めることもあるかもしれない。そして、彼らは彼らなりの「物語」を紡ぎ始めるのである。もちろん、その物語が、そのまちでどのような結末を迎えるのかは、それが始まった時点では誰にも分からない。しかし、もし彼らのまちに強い「意志」があるのなら、その物語は必ずや、何らかの具体的な「改善」を、そのまちにもたらさずにはおかないだろう。より正確に言うならば、そのまちに強い「意志」が存在しているのなら、目に見える具体的な「改善」が見られぬうちに、物語を紡ぐ力が「萎えて」しまうようなこと等あり得ないのである。

かくして、あるまちの物語は、他のまちに「伝染」し、そして、他のまちの物語へと繋がっていくのである。そして、その物語に触れば、さして目的意識も強い意志もなく、日々の日常に埋没している人々の心の内に“意志の力”が蘇ることが起こり得ることもあるのである。さらに言うならば、あるまちの活力ある「物語」は、他のまちの「活力」を蘇らせる力を秘めているのである。

この物語の伝染プロセス、さらに言うなら、物語を通じた、良きまちを志向する意志と活力の伝染プロセスこそが、「コミュニケーション」と呼ばれるものの本質に他ならない。こうした良質の伝染プロセスとしてのコミュニケーションがあってはじめて、無機質な「デザイン技術」を「活用」し、「使いこなす」ことができるような活力あるまちが、一つまた一つと増えていくこととなるのである。そしてそれを通じて具体的な景観の改善が様々なまちで進められることとなるのである。

そうである以上、さまざまなまちの景観改善において何よりもまず大事であるのは、それぞれのまちの物語を、それぞれのまちに関わる人々が、一つ一つ紡ぎあげていこうとする営み以外に何も無いのである。そして、そうした営みをもたらす重要な契機こそ、他のまちの「物語」に触れるという機会なのである。

だからこそ、さまざまなまちの景観改善をもたらそうと考える都市計画者、土木計画者、行政関係者は、それぞれのまちの景観改善の取り組みを、単なる「事例」として無機質に情報を取りまとめるのではなく、血肉の通った「物語」として語らねばならないのである。そして、その物語に、いろいろなまちの人々が触れる機会を、例えば雑誌やテレビなどの媒体、あるいは、研究発表会や受賞発表などの形で様々な形で設けていくことが必要なのである。「まちづくり」にかかわる研究者は、今一度、まちづくりの「物語」とそこに宿る「意志の力」、さらには、それに触れることによってもたらされる「感動」による「伝染」を契機とした、他のまちにおけるまちづくりの自律的展開、といった伝染プロセス／コミュニケーション・プロセス^[1]の存在を、明示的に理解することが不可欠なのである。そして、そのプロセスを如何にして活力ある形で促進していくことができるのかについての智慧を

絞り，その促進に向けた各種の取り組みを続けていくことが必要とされているのである。

脚注

[1] 以上のコミュニケーション過程は，現代科学風に言えばミームの伝染過程，あるいは，進化心理学上の概念を用いて言うならば，集団淘汰圧による集団遺伝子の進化ということもできる（羽鳥・藤井，2008）。ただし，そうした無味乾燥な科学的概念では，本稿で論じた「物語」「物語性」を十二分に表現することは著しく困難である。やはりそこには，「物語」「感動」「伝染」「意志の力」といった，通常の科学では語り得ない，「思想的概念」がどうしても必要とされているのである。これを現代思想の視点で言うなら，本稿で論じているコミュニケーション過程は，例えばニーチェが論じたようないわゆる思想の伝染過程そのものなのである。

なお，物語と伝染から構成されるコミュニケーション・プロセスを明示的に意識した具体的な政策展開として，交通計画の分野で進められている「モビリティ・マネジメント」（c.f. 藤井，谷口，2008）と呼ばれる一連の取り組みが挙げられる。特に，全国の自治体でのモビリティ・マネジメントの浸透と促進を意識した全国大会（日本モビリティ・マネジメント会議，略称JCOMM）が年に一回開催されているが，これは，本稿で論じた，まちとまちの間の「物語」を媒介とした「意志の力の伝染」を明示的に意図して設置された定例会議である。

参考文献

- 藤井 聡：風格ある風景と「行動変容」，In. 土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—，学芸出版社，pp. 11-54, 2007.
- 藤井 聡・谷口綾子（共著）モビリティ・マネジメント入門：～「人と社会」を中心に据えた新しい交通戦略～，学芸出版社，2008.
- 羽鳥剛史・藤井聡：地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討：階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する理論的分析，社会心理学研究，（印刷中），2008.

“地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究： インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写

羽鳥 剛史¹・藤井 聡²・住永 哲史³

¹正会員 東京工業大学助教 土木工学専攻 (〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1-M1-11)
E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp

²正会員 京都大学教授 都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³正会員 株式会社大林組 生産技術本部 (〒108-8502 東京都港区港南 2-15-2 品川インターシティ B 棟 28 階)
E-mail:suminaga.tetsushi@obayashi.co.jp

地域づくりやまちづくりを成功に導く上で、ごく少数、場合によってはたった一名の“地域の問題に熱意を持って取り組む人”の存在が極めて重要であることが経験的に知られている。事実、国土交通省は、様々な地域の観光振興に尽力した人々を選定する“‘観光カリスマ百選’選定委員会”を平成14年～16年度に設定し、その中で“100人のカリスマ”を選定している。本論文では、具体的な人物による実践を総体的に描写・叙述する「解釈学的方法」の重要性を指摘した上で、“観光カリスマ”へのインタビューを実施し、そこで語られた「生の体験や経験」を解釈し、それを物語的に記述することによって、“カリスマ”をその実践に突き動かした根源的活力の理解の一助となり得る論考を述べる。

Key Words : “*charismas of tourism*”, *hermeneutical study*, *vitality*, *narrative*, *interview survey*

1. はじめに

(1) 問題

地域づくりやまちづくりを成功に導く上で、ごく少数、場合によってはたった一名の“地域の問題に熱意を持って取り組む人”の存在が極めて重要であることが経験的に知られている¹⁾。事実、国土交通省は、様々な地域の観光振興に尽力した人々を選定する“‘観光カリスマ百選’選定委員会”を平成14年～16年度に設定し、その中で“100人のカリスマ”を選定している²⁾。ここで選定された“カリスマ”はそれぞれ地域固有の問題に向き合いながら、地域のために献身的に振る舞い、地域振興や観光振興に多大な貢献をなしている。

それでは“観光カリスマ”を地域への献身的な活動に突き動かした“活力”とはいかなるものであったのだろうか。無論、ここに言う活力とは、物理的な力というよりも、人間精神そのものであり、「生そのものが力への意志である」³⁾と論じたニーチェに倣えば、それは人間の“生”に他ならないものと言い得る。地域の問題

に直面し、様々な苦労を経ながらも、決然たる意志をもって事態を打開する精神の在り様にこそ、“カリスマ”の活力の本質があると言えよう。ただし、そうした

活力なるものを理解するにあたっては、そこで得られた確証に基づいて全ての認識が構築できるような所謂「アルキメデスの点」(すなわち、ものごとを理解する上で絶対的な出発点)は存在せず、“カリスマ”の活動する現実世界から隔絶した視座からその活力を理解することは著しく困難(あるいは原理的に不可能)であるという点が危惧される。なぜなら、例えばディルタイらによる解釈学上の哲学的議論を踏まえるなら、人間の生や力とは本来的に、現実世界の中で自己を理解すると同時に、自己が生きる場所の現実世界を理解していくことでしか自己や世界を理解し得ぬような解釈的存在であると言わざるを得ないからである。それ故、我々は現実世界の中にあってはじめて、当該の“カリスマ”の活力、あるいは、生や力を理解すると同時に、他者に伝達可能な形で記述する可能性を手にすることができるものと期待されるのである⁴⁾。それ故、“カリスマ”の活力を理解する上では、研究者自身が、“カリスマ”が住まう現実世界に降り立ち、その社会の常識の共有を図りながらも、その上でなおかつ客観的な立場¹⁾から“カリスマ”の経験を解釈することが重要であると考えられる²⁾。そして、“カリスマ”の生きる経験とはそれ自体が解釈の産物であることを踏まえれば、以上のことは「解釈を解釈す

る」こととも言い換えることもできよう。そうした方法論は、実証主義を批判したシュライエルマッハーやディルタイに端を発し、これまでシュッツやリクール、そしてガダマーやギデンズらによって支持されてきた「解釈学的方法」と呼ばれるものである⁵⁶⁾。

以上の問題意識の下、本研究では、前述の“観光カリスマ”へのインタビューを実施し、そこで語られた「生の体験や経験」を解釈し、その“実践”を物語的に描写・叙述することによって、“カリスマ”をその活動に突き動かした根源的活力への理解を深めることを試みる⁵⁷⁾。そうした“カリスマ”についての物語的記述は、その実践についての単なる客観的事実の羅列やレポートでは伝わりきらない、より本質的な理解、あるいは共感を促しうるものと期待されるからである。そして、そうしたより本質的な理解や共感、例えば土木技術者の実践のために不可欠な“活力”の増進に寄与する可能性も期待されることである。この点については、ディルタイによる解釈学上の論考⁵⁸⁾において、人々の生の実践を記述した「物語」が、その読み手に彼ら先人の経験を追体験する機会を与え、そのことを通じて、彼らの思いや意志が読み手に「伝染」し得る可能性が指摘されていることから示唆されているところである⁵⁹⁾。そうした物語とそこに宿る“カリスマ”の活力に対する「理解」や「共感」と、それを通じた思想や意志の「伝染」にこそ、本研究において、解釈学的方法に基づいて“カリスマ”の実践描写を行うことの重要な実践的意義があり得るものと思われる。この認識の下、本研究では、国土交通省によって“観光カリスマ”に選定された齋藤文夫氏（川崎市観光協会連合会会長）、加藤文男氏（千葉県南房総市企画部長）、船木上次氏（萌木の村(株)代表取締役社長）の3名にそれぞれインタビューを行った。そして、インタビュー調査を踏まえて、筆者ら自身の解釈を通じて、3名のこれまでの経験を描写・叙述することを試みた。

(2) 「観光カリスマ」選定理由

齋藤氏、加藤氏、船木氏が国土交通省によって「観光カリスマ」として選定された理由は以下の通りである。

a) 齋藤文夫氏

『齋藤文夫氏は、東海道の宿場として栄えた川崎宿の復興をめざし、川崎市の観光振興に寄与するために、私財を投じて江戸風の「川崎・砂子の里資料館」を開設した。また、地域の有志を募り二度にわたって市民の手作りによる「大川崎（宿）祭り」を成功させ、市内外に「川崎宿」の存在を知らしめ、川崎市のイメージアップに貢献している。現在は、川崎市観光協会連合会会長として、観光不毛の街であった川崎市を「観光都市・かわさき」へと市民レベルから育てていくことに全情熱を傾

けている』²⁾。このような功績により、第7回観光カリスマ選定委員会（平成16年10月19日）において観光カリスマ（カリスマ名称：東海道川崎宿復興に情熱を注ぎ、川崎のイメージアップに挑むカリスマ）に選定された。

b) 加藤文男氏

『加藤文男氏は、「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」の初代駅長として、計画の立案から、開設後の運営管理に取り組み、特産の枇杷を活用した商品開発や、集客資源を広域的に束ねて誘客する「一括受発注システム」を稼働させ、地域経済を拡大させるとともに道の駅運営法人の黒字経営を持続させた。また、人形劇などの地域文化の磨き出し、インターネットを活用した広域情報の発信による地場産業振興など、多角的な手法で広域的な地域振興にも努めた』²⁾。このような功績により、第7回観光カリスマ選定委員会（平成16年10月19日）において観光カリスマ（カリスマ名称：道の駅と広域連携のカリスマ）に選定された。

c) 船木上次氏

『船木上次氏は、清里の急激な開発と没落を全て目の当たりにしながらも、清里を本物のホスピタリティーと感動を与えることができる地域文化のある観光地にするべく、人材育成やバリエコンサートの開催等地道に独自の活動を続け、流行に流されず清里の活性化に貢献した』²⁾。このような功績により、第2回観光カリスマ選定委員会（平成15年2月21日）において観光カリスマ（カリスマ名称：開拓魂のカリスマ）に選定された。

以下、2章、3章、4章において、インタビュー調査を基に、それぞれ齋藤氏、加藤氏、船木氏についての“実践描写”を記述する。

2. 齋藤文夫氏の実践描写

(1) 「文化不毛の地」からの出発

かつて東海道の宿場町として栄えた川崎は、明治時代を境に、産業の要地として脚光を浴びるようになり、その結果、多くの工場が立ち並び、日本の近代化を牽引する一大産業都市にまで成長した。その一方で、観光の面では、目立った取り組みがなされず、いつしか川崎は「観光不毛の地」、「文化不毛の地」という不名誉な名で呼ばれるようになった。そんな中、1981年に、当時神奈川県議員であった齋藤文夫氏に、川崎大師観光協会会長の任に就くよう要請があった。そして、齋藤氏はその任を務めることとなるが、同氏は当時を振り返り、「文化不毛の地川崎をいかに文化度の高い街にするか」が何よりの課題であったと認識されていたとのことである。



図-1 東海道川崎宿周辺の史跡

(「かわさき区の宝物シート：川崎宿」より抜粋。川崎区より資料提供。図中央の赤線部分が旧東海道。)

(2) 歴史認識の希薄化に対する危機感

しかし、川崎には誇るべき観光資源が存在しないわけではなかった。それどころか、川崎には、江戸時代に東海道川崎宿として多くの旅人が往来し、様々な偉人や史実に彩られた歴史がある(図-1 参照)。例えば、江戸時代に甘蔗糖の農地開発に尽力し、時の将軍吉宗から感謝状を贈られた池上幸豊や、呉服商人の身分にありながら、多摩川の氾濫を防ぐために、幕府に民間省要を建白し、見事に改修事業を成し遂げ、その功により2万石の大名となった田中丘隅をはじめとして、川崎には様々な偉人が輩出されており、そうした人物にまつわるエピソードや史実も残されている。また、大治3年(1128年)に川崎大師が開創されて以来、大師周辺は多数の参拝客で賑わい、多くの店が軒を連ねる門前町として栄えてきた。明治5年(1872年)、我が国で最初の鉄道が新橋・横浜間に開通した際に、川崎に鉄道駅が設置されたのも、この様に古くから栄えてきた川崎大師の存在によるところが大きかったようである。さらに古くは、奈良・平安時代に旧街道が川崎を通過していたと伝えられており、官衛(かんが、役所跡)や古墳等の遺跡も発掘されている。

斎藤氏は、先祖代々川崎に居を構える旧家に生まれ、そうした川崎の古い歴史を肌身で感じながら育った。しかし、斎藤氏は、「自分の住んでいる街にどういふ誇りの持てる歴史があるかということをも多くの人が知らない」という指摘にも示されるように、川崎に住む人々が川崎の歴史や文化を忘れつつあることに強い危機感を抱いておられた。そしてそれと共に、そうした歴史や文化が培われてきたことは誇り得ることであるという認識を、住民に持ってほしいとの思いを、強くお持ちのようであった。以下に詳しく述べるように、斎藤氏は川崎大師観光協会会長の任につかれたことを重要な契機として様々な活動を展開していくこととなるのであるが、その背景にはこうした地域の歴史や文化に対する個人的な強い「思い」があったことは間違いのないところであろう。

以下、その様子をさらに詳しく描写することとしよう。

(3) 歴史的・文化的地域事業の実践

さて、川崎大師観光協会会長に就任した斎藤氏は、そうした思いを携えつつ、川崎の歴史や文化にまつわる様々な取り組みを企画・運営し、川崎の観光振興に取り組んでこられた。まず、斎藤氏は1995年に、地元の故事に倣い、酒飲み合戦を実演する「水鳥の祭」を開催した。この祭りは、江戸時代(慶安2年、1649年)に、川崎の名主であった池上幸広と江戸の儒学者であった茨木春朔とが大師河原で三日三晩にわたって酒呑み合戦を繰り広げたという物語が、江戸時代の仮名草子「水鳥記」に綴られており、その史実に由来するものである。そして、地元の宮司(若宮八幡宮)と商店街の会長とが、斎藤氏にこの地元に纏わる史実を伝えたことがきっかけとなり、この物語を現代に再現する運びとなったことである。地元商店街の協力の下、当時の合戦の様子を再現するこの試みは、多くの見物客を集め、第一回開催から2009年現在で15回目を数えるまでになった。なお、斎藤氏は、第一回目の開催以来、この催しに物語の主人公である池上氏の御子孫を招待されているとのことであった。ここからも川崎の歴史を大事にされたいとの同氏の強いお気持ちを感じ取ることが出来る。

また、斎藤氏は1996年から毎年7月に、川崎大師の境内で「風鈴市」の開催を始めた。この風鈴市は、斎藤氏が、当時の川崎大師の貫主(故高橋隆天氏)から、毎年初詣には300万人にも上る参拝客が川崎大師を訪れる一方で、夏の期間には主だった催しもなく、人々の行き会いも少なくなることから、夏の時期に活気ある地域の催しを行うことは出来ないものか、との相談を受けて始めたそうである。この催しでは、斎藤氏の指揮の下、川崎大師周辺の店主が中心となって全国各地の風鈴を探して回り、店主自らが展示、販売を行っていることである。そうした尽力の甲斐もあって、開始当時は200種類程の風鈴を集める程であったが、14回目を数える今年(2009年)の風鈴市では、全国の都道府県から880種類、述べ3万個もの風鈴を取り寄せるまでになり、来訪者も30万人に上り、川崎大師の夏の風物詩として定着しつつある。

また近年では、斎藤氏の支援の下、地元商店街の若い人達を中心となって、昭和レトロの街並みを再現し、メロン、ベイゴマ、竹馬等の昔ながらの子供の遊びを体験してもらう「楽大師」が毎年4月に開催されており、家族連れで参加する人も多く、地域住民皆で参加できる地域イベントとして盛り上がりを見せている。

斎藤氏は、この様な催しを企画・運営される一方で、川崎大師の歴史や文化を多くの人々に知ってもらおうと

地元の有志を集め、2000年に「川崎大師観光ガイドの会」を発足させた。その後、斎藤氏はこの会を発展させる形で「かわさき歴史ガイド協会」を発足させた。そして同氏は、少しでも多くの人々が川崎を訪れた人々に地元の歴史や文化を案内できるようにとの思いから、自らガイド養成のための講習会に出向く等、この協会の取り組みに積極的に貢献してこられた。

(4) 「大川崎宿祭り」の成功

そして、2001年には、斎藤氏が中心となり、東海道川崎宿の復興を願って「大川崎宿祭り」が開催された。この年は、東海道宿駅制定400周年に当たる年であり、各地で記念イベントが予定されていたが、その一方で、川崎では、当初、主だったイベントは企画されていなかったそうである。そうした中で、斎藤氏は、隣町の品川で盛大な記念イベントが企画されていることを知り、川崎でも地元を挙げて川崎宿を記念する催しを行わなければならないと思い立ったとのことである。その背景には、「東海道川崎宿に対する地元の人々の認識が低くなりつつある」ことに対する憂慮の念があったことは、これまで述べてきた通りである。斎藤氏は、この企画を思い立つや否や、地元の有志を募って「大川崎宿祭り」実行委員会を組織するとともに、地元の企業や商店街に自ら出向いて回り、その運営資金を募ったとのことである。そして、斎藤氏自らが旗振り役となり、次々とイベントを企画し、その実行に尽力してこられた。当時の実行委員会のメンバーの一人は、斎藤氏の企画を見て、「こんなに沢山の行事を我々だけで果たして出来るのだろうか」と半信半疑であったと述べている（大川崎宿祭り実行委員会、2002⁷⁾）。しかし、委員会での斎藤氏の「命懸けでやる」との言葉が、委員一人一人の気力を奮い立たせたとのことである。そして、斎藤氏を始め、実行委員の方々の奮闘の末、遂に2001年5月に、「大川崎宿祭り」の開催を実現させることに成功した。

この祭りでは、川崎宿を代表する「万年屋」を再現し、六郷橋の袂で「六郷の渡し」を復活させる等、当時の川崎宿の様子を再現する様々なイベントが実施された。特筆すべきは、これらのイベントは全て、外部委託に頼らず、斎藤氏ご自身が中心となって、企画から発注に至るまで取り仕切られたとのことである。その中でも、川崎競馬場から八丁畷までの沿道を15万人の人が埋め尽くす中、江戸時代の大名行列を再現した歴史仮装行列が行進するという大パレードが、市民の参加により実現された。このパレードは、川崎市の市民レベルの行事としては前例の無い壮大な催しとなった。この仮装行列について、斎藤氏は、江戸時代にこの東海道を通過していた大名行列を自分達の祖先が拝みながら見送っていたであろう姿を子供時代からよく思い描いていたとのことである、

「ここ（東海道川崎宿）でもって我々の祖先はへーって平つくばって（参勤交代の）大名行列を見送っていたわけですよ。…（その）大名行列を見てやろう、っていうのが、僕なんかは子供の時からの夢でしたよ。それを実現した。」

そしてこの祭りを通じて、地元を中心に、「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」が立ち上がり、この祭りがその後の川崎宿復興に向けた様々な運動のきっかけとなった。

(5) 私財を投じて「砂子の里資料館」を開設する

斎藤氏はこのようなイベントの企画運営に精力的に取り組む傍ら、2001年には、旧東海道に面した自宅の前面を自ら私財を投じて江戸風のなまこ塀を模した壁に改装し、浮世絵の資料館「砂子の里資料館」を開設された。この資料館では、ご自身で収集した浮世絵が無料で公開されている。そして、毎月様々な展示の企画が実施されており、ご自身で作成したカラー刷りのパンフレットも見学者に無料で配布されている。この資料館の改装工事について、斎藤氏は「川崎宿の街並みや雰囲気を持し、後世に伝えることがそこに住む者にとっての重要な責務である」と語っておられ、ここに同氏の一人の歴史的社会的存在としての強い義務感が感じられる。そして、斎藤氏のそうした思いは周囲に少しずつ浸透しつつあり、同氏の取り組みを受けて、店構えや看板を立て替えるお店も出てきているとのことである。

このような功績から、斎藤氏は川崎市観光協会連合会の会長に推薦された。そして、2003年4月に会長に就任した斎藤氏は、以前にも増して川崎市全域にわたる観光振興に精力的に取り組むこととなった。まず、当時観光協会が無かった幸区及び宮前区に地区観光協会を設立された。そして、川崎を訪れた人に「川崎にも観光の場所がある」という認識を少しでも持ってもらえるように、斎藤氏の指示の下、川崎市内の駅前に観光案内所や案内パネルが設置された。そうした斎藤氏の尽力の甲斐あって、現在では各観光協会がお互い切磋琢磨し、区や市の行政と協力して、観光案内パンフレットやポスターを積極的に作成・配布する等、活発に活動するようになったとのことである。また、市制80年を迎えた2004年には、再び斎藤氏が中心となって「大川崎祭り」が開催され、3年前の大川崎宿祭りを超える人々が訪れ、大きな賑わいを見せたとのことである。

(6) 地域の誇りと歴史的使命感

斎藤氏は、インタビューにおいて、次のように語っておられた、

「（地域の住民が）自分の町に誇りを持てること。自分の

郷土を愛すること。これが一番大切（である）。」

しかし、「公害の街」「文化不毛の街」とも揶揄される川崎にあって、斎藤氏は、地域の住民が自分の住む町に誇りを持ってないことを痛感することが度々あったとのことである。しかしながら、川崎には先人達によって連綿と培われてきた歴史が存在することは前述した通りである。そして、斎藤氏は、川崎に住まう人々がそうした歴史を認識し、それに感動することがやがては「子々孫々の誇りになる」と語っておられた。そのためにも同氏は「努力をすることが大事」であるとの覚悟を持っておられた。そうした努力は「(小さな)一駒でしかない」と斎藤氏ご自身も認めておられるが、その一方で「その一駒が次の時代を開ききっかけになる」と語っておられた。そして実際に、斎藤氏の取り組みは、川崎が「文化不毛の街」から「歴史と文化の街」に転換する上での重要な契機となりつつあることは間違いないように思われる。この様に、斎藤氏が川崎の観光振興に尽力した背景には、川崎の歴史に対する深い思い入れの下、先人から引き受けた歴史や伝統を何とか後世に残し、地域の誇りを取り戻さんとする強い使命感があったことを窺い知ることが出来る。

ただし、斎藤氏は、様々な観光振興の任に就くにあたっては、必ずしも自ら進んでその任を申し出ているわけではないようである。このことについて、斎藤氏は次のように語っておられた、

「やっぱり人間関係（が大事）。何も役職が好きでね、…そんなことで（引き受けているわけ）じゃないんです。もう限界だと自分で思いながらもね、…死ぬまで頑張ってやろうかなと。…やっぱり人ですよ。」

斎藤氏には周囲から多くの期待が寄せられており、依頼や陳情が跡を絶たないとのことであるが、信頼関係を第一と考える斎藤氏はそうした依頼を無下に断ることは容易ではない、とのことであった。それと同時に、斎藤氏の次の発言には、人々の要請に自らが応えなければならぬとの氏の強い義務感が感じられる、

「地域を活性化する。それは一人だけの力ではないが、誰かが太鼓を叩いて篝火を高く掲げて駆けなければ人は付いてこない。」

ただし、これまで培われてきた人間関係は、斎藤氏の数々の取り組みを成功させる上での支えともなっているように思われる。大川崎宿祭りをはじめ、斎藤氏の企画の多くは、なるべく業者に委託せず、自前で行っているとのことであるが、その背景にはそうした信頼関係に裏打ちされた惜しみない協力があったとのことである——卓越した歴史感覚に裏打ちされ、逃れ難き人間関係からの要請に応え、そうした人間関係に支えられながら、斎藤氏の多大な貢献が生まれたと言えそうである。（イン

タビュー時期：2008年11月29日、2009年9月30日。インタビュー場所：斎藤氏のご自宅（「砂子の里資料館」）にて。）

3. 加藤文男氏の実践描写

(1) 町長の決断

千葉県富浦町は房総半島の南西端に位置する人口5,700人程の小さな町であり、房州枇杷や花卉等の温暖な気候を活かした農産物が地域の特産である。富浦町は、昭和50年代の初め頃までは、一夏に50万人近くの観光客が訪れ、毎年夏になると東京湾に面した砂浜は海水浴客で大いに賑わっていた。しかし、農産物の輸入自由化、バブル経済の破綻により、基幹産業であった農業や漁業の衰退に拍車がかかり、少子高齢化による過疎化も深刻化した。さらに、全国的高速道路の整備が進捗するに伴い、富浦を訪れる観光客は20万人近くにまで落ち込んでいった。

そうした厳しい状況の中、「座して衰退を待つのではなく、一気果敢に打って出る」との町長の決断により、1990年、富浦町に「産業振興プロジェクトチーム」が設立され、その指揮を命ぜられたのが、地元の高校を卒業して以来ずっと富浦町役場に勤めておられた加藤文男氏であった。町長からの命令は、地域の産業と文化、情報化の振興拠点となる施設を整備し、尚且つ事業の採算を合わせる、という極めて困難なものであった。加藤氏は、当時のことを振り返り「どうやって運転資金を集め、原料を仕入れ、商売を行い、そして利益を出していくのか、一切分からなかったですね」と述懐されていた。

(2) 「枇杷倶楽部」の設立

それでも、「自分達の住んでいる地域は、本来、これほどまでに疲弊する地域ではない」と認識されていた加藤氏は、「手には余るけど、これしかない」との強い決意の下、1993年、千葉県で初の「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」をオープンさせ、その初代所長を務めると共に、その運営母体として町が全額出資した「(株)とみうら」を発足させた(図-2参照)。この道の駅では、カフェを開業するとともに、自家工場を併設し、特産の枇杷を用いた商品開発に取り組み、それを現地で販売するという事業を開始した。なお、当初、町内のほとんどの人は、この事業が成功するとは考えていなかったそうであるが、加藤氏ご自身は、この事業の経営はうまくいくとの予感を抱いておられた。そして実際にも事業は軌道に乗り、黒字経営を維持することが出来たとのことである。



図-2 富浦町と「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」

(写真については、「枇杷倶楽部ホームページ <http://www.mboso-etoko.jp/top/biwakurabu/>」より抜粋。地図については、テクノ「日本白地図イラスト」より抜粋。)

(3) 地域活性化の「歯車」

しかし、加藤氏は、道の駅の事業を行うだけで、この地域が本当に良くなるかどうかについて、当初から疑問を抱いておられた。同氏にとって、道の駅の事業だけでは「地域の歯車」が何か欠けている様に映ったそうである、

「地域の一番下の歯車をカッツて動かすためにはどうするか。(今のままでは)歯車が何か欠けていた。」

加藤氏は、その「歯車」を動かすためには、地域全体を巻き込んで「地域の資源を磨いて活用して、(またそれを)活用して磨かれる」ような事業を行う必要があると感じておられたとのことである。

そこで加藤氏は、道の駅のオープンとともに、花摘み園「花倶楽部」を開業し、そこで富浦の周辺農家に農産物を直売する機会を提供した。そしてそれと共に、地元技術者と協力し、直売に適した品種改良や苺栽培の導入に取り組みをはじめた。こうした取り組みは、観光入込込み数の増進に繋がるとともに、地元農家の活性化にも繋がると考えたからである。すなわち、「地域の一番下の歯車」を回すためには、地元産業との連携が不可欠であるとの“直感”があったのである。

しかし、その開業にあたっては、周囲の反対もあったとのことである。なぜなら、農業部門に進出して事業を展開しても、採算が合う経営を行うことは極めて難しいと予期されていたからである。事実、加藤氏曰く、「誰一人賛成しなかった」とのことである。そして実際にも、これらの事業は毎年赤字を出す等、その経営は困難を極めることとなる。

しかし、そうした事態を回避し、「地元の歯車」を実質的に回していくことを目指し、加藤氏は、地元の店舗や事業者との連携を図り、それまで広く分散していた観光資源を束ねることによって誘客を促進する「一括受発注システム」を提案し、その開発に尽力する。このシステムは、枇杷倶楽部が、南房総に点在する小規模な農園や飲食店等と連携を図るとともに、観光会社に対して企画営業を行い、集客の配分、代金の精算、クレーム処理までを一貫して行うというものである。現在では、電子システムが導入されているとのことであるが、当初、これらの業務はすべて枇杷倶楽部の従業員が手作業で行っていたようで、観光シーズンには一日50件ものツアーの対応に迫られることもあり、多忙を極めたとのことである。

今回のインタビューにおいて、加藤氏は、このシステムを富浦(及び富浦を含む南房総全体)の「自律神経」と喩えておられた。そして、そうした「自律神経」を整えることを通じて、富浦(南房総)という「生命体」が有機的に機能し、活性化されることが重要であると語っておられた。ここからも、加藤氏が、枇杷倶楽部のみの拠点開発ではなく、それを通じて地域全体が活性化されることを重視されていたことを窺い知ることが出来る。そして、実際に、このシステムの稼働により、地元の飲食店、農園、観光事業者等の連携が深まり、ピーク時には年間5千台もの観光バスが訪れ、12万人ものツアー誘致に成功し、当初の苦しい経営の問題が解消したことは言うに及ばず、地元農家の重要な収入源ともなる等、著しい地域波及効果もたらされることとなる。

また、2000年には情報化の拠点として、加藤氏が中心となって、観光客への情報発信を図ると共に、地域内の連携を促進する目的で、枇杷倶楽部のイベントや地域情報等を発信するポータルサイト「南房総いいとこどり」が導入された。この取り組みでは、役場職員がホームページ1頁を無償で作成する「1世帯1ホームページ運動」を同時に展開し、インターネットに馴染みの薄い農家や高齢の事業者に歓迎されているとのことである。

(4) 地域の誇りと文化事業の実践

加藤氏は、以上に述べたような産業振興に取り組むとともに、富浦に関わる様々な文化事業を企画し、その実施・運営に尽力してこられた。その事業内容については、それぞれ以下に述べる通りであるが、加藤氏がそれらの活動に取り組むに至った背景には、ある共通の狙いが一貫してあったことが分かる。すなわち、それは、富浦の人々に自分の住む地域にもっと誇りを持ってもらうことであつた、

「(文化事業を通じて)生きていく誇りが持てる地域になれ

ばいいと思っている。」

今回のインタビューにおいて、加藤氏は、例えば、富浦出身の人に「自分の住む町はどこか」と質問すると、「千葉県」「千葉県の南」「館山の隣」といった答えが大方返ってきて、「富浦」とまず最初に答える人はごく僅かであると苦笑しておられた。そのような状況において、加藤氏は、「富浦の人は自分の地域に対して誇りを持っていない（のではないか）」との懸念を抱いておられたそうである。そして、以下に述べる一連の取り組みは、「富浦に対する誇りを皆に持ってもらうこと」を最終的な狙いとしたものだったのだと述懐されておられた。

まず加藤氏は、地域への誇りを高める上では「まずは自分たちの地域のことを知ることから始める」ことが必要であると考え、そうした機会を提供する場として、1992年に「ウォッチング富浦」の企画を立ち上げた。この企画は、地域に住む自然や歴史の専門家アドバイザーの案内・指導の下、富浦の自然や文化を体験してもらう取り組みであり、これまで子供からお年寄りまで幅広い世代を対象に実施されてきた。この取り組みは、現在まで毎月一回行われており、2009年10月時点で、206回を数えるまでになり、200回時点で、延べ7,150人の参加者を集めている。

また、加藤氏は、南房総で地道な活動やユニークな活動をしている方のお話を聞く「枇杷倶楽部茶論」の企画・実施に取り組んでこられた。この取り組みの背景には、加藤氏が地元の講演会に参加した時の次のようなご経験があったとのことである。当時、地域で講演会を開催するとなると、東京をはじめ地域の外から講演者を招待することが多かったそうであるが、そうした講演者の中には、地域に根差した話をしないばかりか、住民を馬鹿にしたような講演をして帰る人も少なくなかったとのことである。加藤氏は、そうした講演を聞いて自虐的になる住民を見て、この地域は「あなた達（講演者）に馬鹿にされる地域ではない」と感じ、いっそのこと地元で活躍している人に講演をしてもらった方がこの地域のためには良いのではないかと思いついたことが、この取り組みを始めるきっかけであったとのことである。この取り組みも、1995年に始まって以来、現在で160回を数えるまでに至っており、これまで、医者、作家、音楽家、議員、起業家等、多方面に渡る方々に様々なテーマで講演してもらい、毎回好評を得ているとのことである。

さらに、富浦では1988年より地元まつわる人形劇を地域に根付かせる「人形劇の郷」づくり事業が行われていたが、加藤氏はこの事業を発展させる形で「富浦人形劇フェスティバル（現・南房総人形劇フェスティバル）」の企画・運営に主体的に取り組んでこられた。この取り組みは、もともと人形操作の第一人者（伊東万里

子氏）が富浦に住んでおり、地域活動に熱心であったことがきっかけで企画されたとのことである。そして、加藤氏ご自身でも活動資金を募り、フェスティバルの開催を実現させたとのことである。このフェスティバルは毎年夏に開催されており、今年で21回目を数え、富浦を代表する恒例事業として定着している。

このフェスティバルについて、加藤氏は、地域の子ども達に「本物（の芸術）を見せてあげたい。田舎ではなかなか本物を見られない」との思いを語っておられた。そして、そうした本物の芸術に触れることを通じて、子供たちが「見る目を持つ」「見識を深める」ことが、やがて地域に対する誇りの形成につながるのではないかと考えておられた。実際に、人形劇を演じる劇団の方から、富浦の子供たちは「反応すべきところできちっと反応する」との評判が立っているようで、そうした見識を養うことが、やがて地域の誇るべき文化の形成に役立つであろうと、加藤氏は語っておられた。

(5) 逆風の声

加藤氏は、12年の歳月をかけてこれらの事業を企画、提案し、その実行においても中心的な役割を担い、それぞれの事業を軌道に乗せることに尽力してこられた。そして、そうした「枇杷倶楽部」の一連の取り組みが功を奏し、年間20万人にまで落ち込んでいた富浦の観光客数は現在100万人を超えるまでになり、またそれまでの夏一季型の観光地域から、年間を通じて観光客が訪れる地域となった。

この様に、様々な事業を着実に推進してきた加藤氏であるが、これまで必ずしも順風満帆に事が進んできたという訳ではなかったようである。そこには一部の人々からの様々な批判があったようである、

「自分達がどんなにこの地域に対する情熱を持って、世間のすべての人から評価されることはない。むしろアゲンスト (against) の風が吹いてきましたね。」

特に、枇杷倶楽部のような集客施設に観光客を誘致すると、前述したように、周囲の店舗との連携を図ることに努めたとしても、一部の店舗の売上げが下がる可能性を完全に排除することは難しく、そうした人々の理解を得ることは極めて困難であったとのことである。加藤氏曰く「今でも完全に理解が得られているかどうか分からない」とのことである。また、議会での一般答弁の矢面に立たされたこともあり、お金の無駄遣い等、様々な批判に曝されたとのことである。それでも反対者の意見を大事にした上で、他の人たちの期待に応えていくという活動を続けてこられたのが、この12年間であったと加藤氏は振り返っておられた。

(6) 反骨の精神

しかし、そうした逆風の声は、必ずしも加藤氏の意志を打ち砕くものではなかったようである。むしろ「批判があった方が工夫するし、批判があった方が頑張れる」と加藤氏は語られているように、そこには逆風に負けんとする猛々しさが筆者には感じられた。そして、「世の中の人というのはね、自分が思うように評価する訳じゃないし、それが世の常だろう。仕方がない」と認識されていた加藤氏は、それでもこの事業を成功させる以外に富浦の生き残る道はないという強い信念を持っておられた。そして、何より、加藤氏にとって枇杷倶楽部で共に働く人達の存在が大きかったようで、そうした人達に支えられ、この事業は必ずうまくいくことを直感的に確信されたそうである、

「誰と勝負しているか、誰と闘っているか分からなかったけど、この勝負勝てる。」

それと同時に、一緒に働く人々を含め「この事業を守っていかねばならない」と強く感じられたとのことである。

加藤氏ご自身が語っておられるように、「前例がなく」、「誰もやりたがらない」、そして「楽しかったけれど、2度とはやれない」、それほどの仕事をやり遂げてこられたのは、逆境に負けない反骨の精神と、誇るべき、そして、守るべき地域の価値があったためではないかと思われる。(インタビュー時期：2008年12月8日、2009年10月8日。インタビュー場所：「道の駅枇杷倶楽部」(第1回インタビュー)、「南房総富浦ロイヤルホテル」(第2回インタビュー)にて。)

4. 船木上次氏の実践描写

(1) 開拓の原風景

清里(山梨県北杜市)は、山梨県の北西部、八ヶ岳連峰の南麓に広がる標高1000mから1500mの高原地帯である。この地は、1938年、東京都の水瓶となるため小河内ダムの湖底に沈んだ村を追われた人々によって開拓された。当時、荒涼とした清里の原野を開拓する人々を支えたのは、後に「清里開拓の父」と呼ばれるポール・ラッシュ博士であった。関東大震災後のYMCA再建委員として1925年に来日したポール・ラッシュ博士は、翌年より立教大学に赴任し、その後1938年に、清里の地にキリスト教布教の拠点として青年研修施設「清里寮」を完成させた。そして、第2次世界大戦後、とりわけ貧しかった寒村清里の地において、高冷地農業のモデル農村を建設すべく尽力した。同博士は、アメリカの各地で献金活動を行い、資金を集め、農村センター、農業



図-3 「萌木の村」村内図
(「萌木の村」より資料提供。)

学校、農場、診療所、図書館等をこの地に設立するとともに、農村センターの仲間とともに高原野菜の栽培や乳牛の飼育に献身的に取り組んだ。

農村センターの農場長の息子として生まれた船木上次氏は、この清里の地で自分の父親とポール・ラッシュ博士、そしてセンターのスタッフに囲まれて育った。船木氏の活動の原風景には、彼らが貧しい中にも生きて働きと働いていた姿が焼き付いているとのことである⁸⁾。

(2) ペンションブームの到来

1971年に、東京の大学を中退し、清里に戻った船木氏は、地元の若者が語り合える溜まり場を作ろうと、喫茶店「ロック」を開店した。そして、「ロック」の経営が軌道に乗った頃、ホテル「ハットウォールデン」をオープンさせた。ここには、若い頃にホテルマンを目指していたポール・ラッシュ博士の影響があったとのことである。

さて、船木氏がホテルをオープンさせた頃から、清里ではペンションブームが到来し、リゾート開発が急激に進められることとなった。高原の豊かな自然景観と、ポール・ラッシュ博士に始まる開拓の歴史が女性誌を中心にメルヘンチックに取り上げられ、突如脚光を浴びるようになったのである。当時の清里取材した記事⁹⁾にも「至る所にヌイグルミ人形があふれており、ゾウのような巨大な牛を型取った建物の店などもあり」「その勢いはとどまるところを知らない」とあるように、清里には派手な店構えの土産物店やタレントショップが軒を連ね、全国から若者が大挙して押し寄せることとなった。そして、10年間で100軒を超すペンションが立ち並び、いつしか清里は「ミニ原宿」「メルヘンのメッカ」と呼ばれるようになった。そうしたブームの一方で、ポール・ラッシュ博士が設立した農業学校は、志望者が少なくなり、閉校に追いやられることとなる。

(3) 「萌木の村」設立

しかし、船木氏は、ブームに乗って無秩序にペンションが立ち並ぶ状況を目の当たりにして、このままでは清里が個性のない観光地になってしまうのではないかという強い危機感を抱かれていたとのことである。今回のインタビューでも、当時の清里を述懐されながら、次のように語っておられた、

「みんな便利さと経済性だけを追求して、本来手に入れなければいけないものを忘れてる」、

「多様な価値ではなく、（経済性という）一つの価値で色々なものを測って、それをモデルとして、そしてそれが正しいと決めつけているような気がしてならない。」

この様に、船木氏にとって、清里の急激なりゾート開発は、利益のみを追求した「乱開発」と映っていたようである。しかし、同氏は「地域はバランス（が大事）」と語っておられるように、経済性一辺倒ではなく、多様な価値のバランスを保ちながら、あるべき方向に向かっていくことが重要であるとの認識を持っておられた。そして、船木氏は、そうした理念を実現する受け皿として、1977年に「萌木の村」を設立する（図-3 参照）。「萌木の村」は、手作りの工房を中心にして、地道にもづくりを続ける若者に活動の場を提供することから始まった。

(4) ペンションブームの終焉と文化事業の実践

平成の時代に入ると、船木氏が危惧していた通り、清里の開発ブームは、バブルの崩壊と共に終焉を迎え、観光客も徐々に清里から離れていった。観光客数はピーク時の6割程度にまで落ち込んだとのことである。そして、ペンションの経営者も元々ブームに単に便乗していただけのこともあって、そうした事態に為す術もなく、清里の地を去っていった。そして、繁盛していた駅前通りはシャッター街となり、清里の町は徐々に寂れていくこととなる。

この様に清里の開発ブームが終焉を迎える中で、船木氏は、観光のみに軸足を置いた清里の将来を憂い、地元根付いた文化を残す道を模索されていた。そんな折、船木氏は、地域づくりのヒントを得る目的で、清里の仲間と共にドイツのロマンチック街道に視察に出かけたが、そこで一台のオルゴールに出会うこととなる。当時、偉大な歴史に彩られたロマンチック街道を目の当たりにして、そのような歴史や文化を持たない自分達はどうかと思えばよいかと思ひ悩んでいた折、ミュンヘンのアンティーク市で出会ったのがこのオルゴールであったそうである。船木氏は、このオルゴールの音色を聞いた瞬間、「これだ」と直感したとのことである。同氏は、すぐにこのオルゴールを購入するとともに、1986年、萌木の村にオ

ルゴール博物館を創設し、世界各国のオルゴールの収集を始められた。このオルゴール博物館には、現在260点ものオルゴールや自動演奏楽器が並ぶまでになり、その中には、モーツァルトが自動演奏楽器用に作曲した2曲を演奏できる世界に一台しかない「モーツァルト・バレル・オルガン」も含まれており、船木氏のオルゴール収集は世界にも認められるものとなった。

その他、萌木の村では、船木氏を中心に、レストランや雑貨店等、様々な事業やイベントが実施・展開されてきた。そして、素焼き、革細工、彫金の手作り工房から始めた萌木の村は、現在では18施設を擁するまでとなり、年間入場者数も40万人にまで上り、清里への集客を担っている。

(5) 「清里フィールドバレエ」の取り組み

その中でも、今年（2009年）で20年目を迎えたクラシックバレエの野外公演「清里フィールドバレエ」は、地元の協力を得ながら回を重ね、清里の「夏の風物詩」として定着しつつある。もともと船木氏の奥様が地元の子供達の教育のためにバレエ教室を主催されていたところ、日本のバレエの第一人者であった今村博明氏と知り合いになり、同氏が清里の自然に魅かれ、船木氏に野外公演を依頼したのが、この催しを始めるきっかけであったとのことである。野外の特設ステージで行われる幻想的な公演は徐々に人気を集め、1990年の開始当初、2日間の公演で観客は350人程度であったが、現在では2週間の公演で全国から1万2千人もの観客が集まるまでに成長した。また、公演期間中の周辺施設への宿泊客も6千人に上り、地域に大きな経済効果をもたらしている。

この様に「清里フィールドバレエ」の取り組みは、一見すると順風満帆に見えるが、別のインタビューにおいて、今日に至るまで「苦難の連続であった」¹⁰⁾と船木氏は振り返っておられるように、これまで公演を続けてこられた道のりは決して平たんではなかったようである。実際に、野外ステージで行われるため、天候次第で公演が中止になることもしばしばであり、何より過酷な自然環境の中で公演者とスタッフの負担も少なくないとのことである。また「損得勘定ならとっくに幕を下ろしている」¹¹⁾と船木氏が語っておられるように、収支は毎年赤字続きのようである。それでも公演を続けてこられた背景には、「人々に感動を伝えたい」との思いがあったと船木氏は語っておられた。そして、「フィールドバレエを通じて、清里の人々が自分の住む地元を誇りに思ってもらえると嬉しい」と述べておられた。

今回のインタビューでは、船木氏よりこのイベントに関する一つのエピソードをお伺いした。それは、2008年の公演のことである。全盲の来場者が、クラシックバレエの音や雰囲気を感じたいと訪れたそうである。船木

氏は驚きながらも、その人のために舞台の袖で鑑賞できる席を特別に手配した。本番が終わり、その人が船木氏のところへお礼を言いに来た時のことを回顧されて、同氏は次のように語っておられた、

「最後にその女性が俺のところに来て、お礼を言うのだけでも、手を握って、今日は本当に楽しかったって言って、グューって手を握られた瞬間、…俺は自分のやっていることに生きがいを感じるわけ。」

船木氏にはポール・ラッシュ博士という偉大な先人の記憶が今も生き生きと残っているとのことであるが、それと同様に、「その人の中にクラシックバレエの記憶が一生残っていることが何よりも嬉しい」と、船木氏は語っておられた。

(6) 多様な価値における「平衡術」の実践

この様に、時代の変化の影響を様々な形で経験してきた清里にあって、船木氏は独自の活動を続け、地域の振興に貢献されてきた。そこには船木氏の地域の在り方に対する透徹した哲学があったように見受けられる。船木氏は、人々が「自分の能力以上の所得でも、それ以下の所得でも悩む」ように、地域にも適切な価値の水準があり、その適切な水準を保つことが重要であると考えておられた。そのためにも、地域において、多様な価値が共存し、それらが全体としてバランスを保つことが重要であると主張しておられた。船木氏が「萌木の村」を設立した目的も、この「地域のバランス」を保つことにあったことは、既に述べたとおりである。

一方、船木氏は、人々が経済的価値のみを追求した結果、価値における全体のバランスが崩れてしまうと、人間は快樂と欲望の赴くままの存在に墮する可能性があるとして危惧しておられた。このことに関して、同氏は「地域が経済的に豊かになっていった時、人々に能力が無いと欲望にしか（お金を）使えなくなる」、そして「人間は本能だけだと社会が乱れてしまう」と語っておられた。その上で、「お金を綺麗に使うというのは民度（が必要）」と語っておられた船木氏にとって、そうした事態を防ぐためには、地域の「民度」を高めることが重要であるとのことである。そのためにも、オルゴールやフィールドバレエ等、お金では買えない価値を地域の中で見出し、地元の人々がそうした価値に感動し、それを磨いていくことが重要であると考えておられた。すなわち、船木氏がオルゴール収集やフィールドバレエを始め、様々な文化事業に取り組んでこられた背景には、多様な価値におけるバランスを維持し、地域の「民度」を高める必要があるのだ、という強い信念があったためだと言えるのではないかと言うことができよう。

さらに、船木氏は、自分自身や自分の所属する組織に

ついて、常に2つの視点を持って思考するように心掛けておられると述べておられた。すなわち、「（自分について考えるときは）自分と家族、（家族について考えるときは）家族と会社（萌木の村（株））、（会社について考えるときは）会社と清里、（清里について考えるときは）清里と北杜市、（北杜市について考えるときは）北杜市と山梨県、（山梨県について考えるときは）山梨県と日本、（日本について考えるときは）日本と世界」といった形で、常に2つの視点に思考の軸足を置き、それぞれのバランスを保つことを心掛けておられるとのことである。そして、「そのバランスを崩すと、無理があるから、最終的にはどっかでしっぺ返しがあるだろう」と船木氏は語っておられた。

この様に、船木氏は、多様な価値のバランス、あるいは、組織や地域間のバランスを図りながら、様々な取り組みを実践されてきたのだと言うことができるだろう。それは、同氏が、地域における様々な価値葛藤を何とか平衡に至らせんとする、言わば、価値における「平衡術」¹²⁾を実践されてこられたとも解釈することが出来るように思われる。そして、同氏がそうした実践的態度を持つに至った背景には、ペンションブームに沸き立つあまり、あるべき平衡感覚を失い、無秩序な開発を推し進めた清里の盛衰を目の当たりにしてきた、これまでの経験があったためではないか、という推察は十分に成立し得るものであろう。

(7) 「感動」が「必然」を量る物差し

船木氏は、地域における価値のバランスを保つ上で、地域の「必然」を看取することが大事であると語っておられた。ここで、船木氏の述べておられる「必然」とは、同氏がこのことに関連して「すべての役割は求められて（あるべき）」と語っておられたことを踏まえれば、人々からの真の期待や要請を見極め、それに応えることを通じて自ずともたらされるような、「必ず然らしむる」状態を指すものであると言えそうである。そして、そうした「必然」に至ることこそが、地域のバランスを保つことになる、と、船木氏は考えておられるようである。その反対に、奇抜な発想を編み出すことや、一時的な流行に追随し、それを表層的に模倣することは、人々の本来求めるところではなく、それ故、それは地域に根付くことはないと考えておられる。

さらに、船木氏は、「感動するものは皆が求めているもの」と語っておられるように、地域の「必然」に至る上で、人々が「感動」するかどうかを何よりも重視されていた。すなわち、船木氏にとって、人々の「感動」こそが「必然」を看取する上での重要な「物差し」であったと言えるのである。しかし、船木氏は、現代社会を評して、「（人々の）感覚が無くなったことに問題」があ

ると指摘し、次のように語っておられた、

「多くの人は感動を知らずして、他の物差しで量るわけ。決算とか、そんなものどっちでも良い。」

それでも、

「結果として、感動するものは、最後に採算がとれるでしょう。永遠に赤字ということはあり得ないでしょう。」

毎年、多くの赤字を出しながらもフィールドバレーを続けてこられた理由は、何よりもこの「感動」に拠るところが大きいものと言えるだろう。そして船木氏は、そこに地域のあるべき「必然」を見ておられたように思われる。同氏はこのフィールドバレーを「永遠に続ける」と力強く語っておられた。

先人の意志を引き継ぎ、激動する清里において、様々な価値葛藤における平衡術を実践し、人々に感動を与えんとする船木氏の姿に、氏自身が築き上げてきた人生哲学を垣間見ることが出来るように思われる。(インタビュー時期：2008年12月13日、2009年9月4日。インタビュー場所：「萌木の村」にて。)

5. 「地域カリスマ」の活力の解釈学的検討

以上、3名の“カリスマ”へのインタビュー調査を基に、それぞれの実践を物語的に描写・叙述した。本章では、以上の実践描写を踏まえて、3名の“カリスマ”をその実践に突き動かした根源的活力について、関連する哲学的議論に依拠しつつ、筆者らの論考を加えることとする。

なお、以上の実践描写は、3名の“カリスマ”それぞれの解釈的世界を描出したものであり、以下の論考は、そうした独自の解釈的世界の中から、共通の性質を分析的に抽出することを通じて、“カリスマ”の実践とその活力についての統一的自然科学的説明を与えようとするものではない点には留意が必要である。

ここに、“統一的自然科学的説明”と“客観的立場からの解釈”とは大いに異なるものである。前者は後者の特種な一形態に過ぎぬものであり、前者のみが物事を理解する唯一の方法論では無いことを、我々は思い出さなければならない。例えば、人間の生き様や思い、ひいては感動を余すところ無く記述し尽くすことができる統一的自然科学的説明など存在しないであろうことは、誰もが直感的に納得しうることであり違ひなからう。むしろ、統一的自然科学的説明を求めるための分析的行為は、それぞれの解釈的世界との文脈的関連性を喪失することになりかねないとすら言うことができよう。しかしその一方で、自らの“個人的な体験”を、個人的・私的な視点からではなく、“客観的な視座”から解釈す

ることを志向することは可能なのである。これこそが、自然科学と対比される、例えばヒューム¹⁷⁾が志した“社会科学”の最も基本的なアプローチなのであり、本稿もそのアプローチを採用するものである。すなわち、3名の“カリスマ”とのインタビューを通じて得られた筆者らの経験それ自体は決して個別に分断されたものではないという点を前提とし、その共通経験を基に、“カリスマ”による実践の営みについて“客観的な立場”から“解釈”し、そのことを通じて、“カリスマ”の活力への理解を深めようとするものである。

(1) “Active Passiveness”の精神

今回のインタビューを通じて、斎藤氏、加藤氏、船木氏の各氏が地域の問題に取り組むに至った背景には、地域やそこに胚胎する歴史といった何かしら個人を超越もしくは包括した全体的「状況」からの要請があったことを窺い知ることが出来る。すなわち、斎藤氏においては、川崎の歴史を後世に残すことに対する義務感があり、そこに地域からの具体的な要請が結実したと見て取ることが出来る。加藤氏においては、富浦の衰退を回避せよとの地域からの要請があったと言うことが出来よう。船木氏においては、ポール・ラッシュ博士の意志を受け継ぎ、地域のあるべき「必然」に自らの活動の拠り所を置いておられたと言うことが出来る。そして、少なくとも、各氏が経験されてこられた幾多の困難や相当な労力を鑑みれば、各氏がその個人的動機から自ら進んで地域への取り組みを始められた訳ではないように推察されるところである。このことは、例えば船木氏が「すべての役割は求められてだから」と語っておられたことから窺い知ることが出来る。

しかし、以上のことは、各氏が、ただ単に自らに課された要求に受動的に従っていることを意味するものではないと言わなければならない。むしろ、各氏において、自らの置かれた状況に指し示された要請を察知する開かれた精神を宿し、それを引き受けることを自らよしとした決断があったからこそ、長年にわたって、地域をより良くしようと意志する自発的な活力が途切れることがなかったのではないだろうか。筆者には、様々な苦難にも関わらず、地域に献身することを決断した“カリスマ”の姿に、ソクラテスが論ずる「万やむを得ない強制と考えて、そこへ赴く」¹⁸⁾国家の守護者の姿と相重なるところが少なくないように感じられる。

以上の点を踏まえると、各氏は、自らに授けられた要請を積極的に感受し、それを引き受ける、言わば「積極的受動性(“active passiveness”）」とも言うべき精神的態度を有していたのではあるまいか。無論、そうした要請を引き受けることは、一個人にとって、極めて負担の重

い「受難」であったと言える。しかし、そうであるからこそ、「カリスマ」は、それを「万やむを得ぬ」ものとして引き受ける、絶対的な「情熱」を持つに至ったのではないだろうか。筆者らには、各氏のそうした「積極的受動性」の精神にこそ、活力が生じ得る契機があるように思われるのである。

(2) 「葛藤と矛盾の平衡」と「活力」

繰り返し述べることとなるが、そうした「積極的受動性」の精神とは、ただ単に自らに課された役割に従属的に身を委ねることを意味するものではないことは、強調すべき点であるように思われる。なぜなら、そうした従属的な態度を通じては、幾多の困難にも関わらず、地域に献身する“カリスマ”の自発的な活力は生じ得ないものと考えられるためである。むしろ、「私たちは、自分が自由であるということにおいて、超越者から私たちに授けられているという意識をもつ」と論じたヤスパース(1954)¹⁴⁾に倣えば、“カリスマ”は、その実践の営みにおいて、「あれかこれか」¹⁶⁾の自由な決断を為さんとするからこそ、その決断の瞬間においてはじめて、地域や歴史といった自らを超越した存在からの要請を察知する可能性を手にすることが出来た、とも言えるのではないだろうか。それは「自由の絶頂においては、私たちの行為は必然的であるように思われる」¹⁴⁾という自覚であるとも言えることが出来よう。すなわち、ヤスパース¹⁴⁾に拠れば、人間は自分が自由であればあるほど、人間本来の自覚として、その自由は、自分以外の自分を超越した存在から委ねられているとの認識を持つに至るのである。そうであるからこそ、船木氏は、地域の「必然」を求めながら、「人間に一番大事なことは自分で決定すること」と述べておられたのではないだろうか。そうした意味において、“カリスマ”の精神には所謂「独立自尊」¹⁵⁾(「心身の独立を全う」し、社会に献身する「其身を尊重」せんとする態度)の構えが備わっているとも言えることが出来るであろう¹⁵⁾。

そしてそうした「主体性を伴う自由なる決断」は、常に、現実存在する矛盾・葛藤の全てを一手に引き受けつつなされるものであることを踏まえるなら、先に述べた“カリスマ”の「積極的受動性」の態度とは畢竟、「独立」(或いは「自由」「積極性」)と「従属」(或いは「必然」「受動性」)との間の矛盾・葛藤を弁証法的に総合せんとする「実践的態度」なのだと解釈することができるであろう¹⁶⁾。ここでキルケゴール(1981)¹⁶⁾が「あれかこれかのどちらかを選ぶという絶対的な情熱があつてこそ、個人は自分自身との一致を決意することができる…矛盾の原則というものは個人を力づけて、自分自身にたいして忠実ならしめるものである」と論じてい

る言葉を引用するなら、地域の“カリスマ”は、「理想」と「現実」,「個人」と「集団」,「過去」と「未来」といった、様々な矛盾や葛藤を一手に引き受け、そこに平衡をもたらさんと意志する者であると言って差し支えないであろう。

事実、船木氏は、経済的価値のみを追求した清里開発に疑義を呈し、多様な価値の葛藤において平衡を保つことの必要性を強く主張しておられた。加藤氏もまた「枇杷倶楽部にいると自分の利益、地域の利益等、いろんなことを考えないといけない。そのバランスを保つことがこの事業の醍醐味」と語っておられたように、枇杷倶楽部の利益と地域全体の利益、あるいは、地域内の様々な利害対立において、何とか平衡を保持しようと取り組んでこられたものと考えられる。そして斎藤氏は、「文化不毛の街」川崎に、産業化・工業化の「過剰」を見てとり、そこに平衡を取り戻そうとして、歴史と文化の振興に献身してこられたと解釈することは十分に可能であろう。さらに言えば、同氏が川崎の歴史についての感覚を失わないのは、詰まるところ、西部(2000)²³⁾において指摘されているように、「歴史」及びそこに胚胎するであろう先人の知恵たる「伝統」にこそ、現実の葛藤の中であるべき価値判断を指し示す「平衡感覚」が貯えられているとの信念があつたからこそではないかと推察することも可能であろう¹⁷⁾。そもそも、仮に川崎の歴史・文化事業に取り組む理由が、歴史の復古それ自体を大事とする、因習主義的な動機に基づくものであつたとするのなら、大川崎宿祭りを始め、川崎の歴史にまつわる数々の取り組みを「命懸けでやる」との覚悟は生まれなかつたに相違ないのである。

この様に、諸葛藤において何とか平衡を保持せんとするところに、“カリスマ”の生に活力が漲る源泉があると言えるのではないだろうか。なぜなら、相対立するものの中で緊張を保ち、それぞれが過剰に陥ることを防ぐためには、そこに過剰な努力が必要とされると言えるためである。西部(1996)¹²⁾の比喩を用いれば、それはさながら「曲芸師が一本の綱の上で平衡を保とうとするときにおびたしい緊張と活力が彼の心身をつらぬいている」ことになぞらえられるものと言えよう。

つまりは、葛藤や矛盾の平衡を保守せんとする実践的態度にこそ、“カリスマ”の活力の本質が有り得るものと考えられるのである。そうした平衡の実践とは、「綱渡り師」が一度その緊張を解いた瞬間に綱から落ちるように、“カリスマ”をはじめ当該地域に住まう人々がその努力を怠るや否や、当該地域は平衡を失し、やがて衰滅するに至るといふ危機の意識を伴うものであると言える。このことは、斎藤氏にあって、川崎という「歴史的共同体」の衰退に対する憂慮の念があり、加藤氏にあって、富浦という「生命体」の衰退に対する危機感があり、

船木氏にあって、より直接的に、清里という「地域のバランス」を失うことに対して「清里はいずれ沈没してしまう」¹¹⁾との危惧の念があったことから窺い知ることが出来る場所である⁸⁾。

そして、そうした危機の意識があるからこそ、「綱渡り師」が命を賭して綱を渡るように、“カリスマ”の平衡を目指す実践的営みに「真剣さ」が備わるものと考えられる。そして、この平衡を保たんとする真剣な営みの果てにおいてはじめて、「理想性とは相対立するものの均衡である」とキルケゴール(1981)¹⁶⁾が述べたように、地域のあるべき「価値」が見出されるのではないだろうか。そうした「価値」こそ、例えば、斎藤氏が求めておられた「子々孫々の誇り」であると言ってよいように思われるのである。

(3) 『現代の批判』

以上、地域の“カリスマ”が「積極的受動性」の精神を有していることを指摘した上で、そうした精神を持って、様々な葛藤において平衡を保たんと実践するところにこそ、“カリスマ”の生が活力に満ち溢れたものになる所以があることを解釈学的に論じた。本節では、最後に、以上の論考を踏まえた上で、そうした“カリスマ”の実践（とそれに対する筆者らの解釈）が示唆するところについて、デンマークの哲学者キルケゴール(1981)¹⁶⁾の著書『現代の批判』を基に、更なる解釈を加えることとしたい。なぜなら、以上の解釈学的議論は、以下で見るように、キルケゴールの論じた『現代の批判』と類似するところが少なくないものと考えられ、そこに現代社会に対する重要な含意が有り得るものと思われるためである。

さて、セーレン・キルケゴール(1981)¹⁶⁾は、『現代の批判』において、自己の矛盾に耐えて生きながら、その矛盾の中にある「あれかこれか」の選言的な決断を為さんとするところに、人間の実存の可能性を指摘するとともに、そうした「矛盾の原則」を排した時代に対して、「分別の時代」「情熱の無い時代」「束の間の感激にぱっと燃えあがっても、やがて小賢しく無感動の状態におさまってしまうといった時代」として徹底的な批判を与えている。ここで、地域の“カリスマ”とは、まさにキルケゴールが論ずる、「矛盾の原則」に耐えながら、「あれかこれか」の決断を為す精神の力を宿し、それを実践してきた者に他ならないであろうことは、上述の論考の通りである。

その一方で、例えば、船木氏が「多様な価値ではなく、(経済性という)一つの価値で色々なものを測って、それをモデルとして、そしてそれが正しいと決めつけているような気がしてならない」と指摘されていたことは、現代において「矛盾の原則」がますます排除されつつあ

るという可能性を示唆しているものと考えられる。すなわち、例えば金銭的な価値一つを取り上げても、それは貨幣の交換を可能にする信頼や協調といった非金銭的な価値なくしては成立し得ないといったように、物事を2面的(あるいは多面的)に捉え、そこに平衡を与えようとする意識が人々において希薄化しつつあることに対する懸念を、同氏の発言から読み取ることが可能であるように思われる。

ここで見方を変えれば、“カリスマ”の活動の背景には、そうした「矛盾の原則」の排除とそれに伴うであろう価値の「過剰」に対する危機感があったものと解釈することも可能であるように思われる。すなわち、斎藤氏にあっては、伝統に対する畏敬の念を失った過度な「進歩主義」に対して、加藤氏にあっては、(富浦という)地域全体に対する配慮を失った過度な「個人主義」に対して、船木氏にあっては、文化に対する敬愛の情を失った過度な「拝金主義」に対して、それぞれが平衡を逸しつつあるとの危惧の念があったと見て取ることが出来る。さらに言えば、そうした価値の過剰の中で、人々が「失感症」に陥りつつあることが、「(人々の)感覚が無くなったことに問題がある」「多くの人は感動を知ら(ない)」との船木氏の指摘において暗示されているものと考えられる。

この様に、“カリスマ”の実践的活動に対する以上の議論より、彼らと直接間接に関わる周りの人々において、あるべき「矛盾の原則」が排除されつつあり、それ故、自由な決断を為す領域がますます狭くなりつつあるという現代の様相が却って浮き彫りになっているように思われる。しかし、キルケゴールの言を借りつつ端的に言うなら、「善か悪かという質の上での対立」¹⁶⁾を排した「非決断性はすでに悪」¹⁴⁾とすら言うべきものですらある。なぜなら、矛盾・葛藤を総合せんとする努力を放棄した非決断的態度は、人間の生そのものを否定するものと言えるのであり、そこには「絶望」しか見出されないためである。そうであるからこそ、キルケゴールは、人々がそうした総合化への精神の上昇運動を止めた時代を「水平化の時代」と呼び、そこに次のようなグロテスクとしか言いようのない描写を与えたのである。

「多くの人が、おそらく絶望の悲鳴を上げることだろう、…見よ、水平化の鋭い鎌がすべての人々を、ひとりひとり別々に、刃にかけて殺してゆく。」¹⁶⁾

そして、そうした「水平化の時代」にあっては、「英雄(すなわち傑出者、それぞれ異なった位置に応じて卓越している人々、指導者たち)」には、その偉大な事業に対する讃嘆を得ることなど望むべくもないことは、キルケゴールの指摘するところである⁹⁾。そして、この指摘と加藤氏と船木氏の以下の発言との類似性は、少なく

とも筆者らにとっては、単なる偶然のこととは思われないのである。

「世の中の人というのはね、自分が思うように評価する訳じゃないし、それが世の常だろう。仕方がない。」(加藤氏)

「やり遂げるまでは人の見えないことをやる。皆に理解してって言ったって理解なんて出来るわけがない。…(でも)それを信じてやるわけだから。(周りの人が)見えて理解できるようになるまでは批判の連続。…その時に負けない人間がリーダー(である)。」(船木氏)

しかし、「目立たない者」たる“カリスマ”には敗北しか約束されていないという訳ではないことは付言すべきであろう。むしろ、キルケゴールが指摘するように、「目立たない者は受難によって水平化に打ち勝つ」ことが許されているのである。それは同時に、「目立たない者」の「生き方の法則」をも規定するものであると、キルケゴールは述べている。すなわち、

「その法則(生き方の法則)は支配するのでも、操縦するのでも、指導するのでもなく、受難によって奉仕することである。」¹⁶⁾

この「受難によって奉仕すること」こそ、“カリスマ”の心身を貫く「積極的受動性」の精神的態度に他ならないものと言えよう。そして、そうした“カリスマ”の実践とは、「水平化」に対する人生を賭した抵抗であったと解釈できるのではないだろうか。さらに言えば、加藤氏の以下の発言は、そうした抵抗には「勝利」の可能性が幾ばくかでも残っていることを我々に力強く語りかけているように思われる。

「誰と勝負しているか、誰と闘っているか分からなかったけど、この勝負勝てる。」(加藤氏)

築土構木を為すことを通じて地域、国民、社会、そして、公共に“奉仕”することを本分とするのが土木技術者であるとするなら、そうしたあるべき土木技術者もまた、それぞれの“カリスマ”が直面している“現代の受難”と同様の“受難”を、それぞれに受けているに違いない。しかし、加藤氏が直感したように、その受難によって何も全ての“カリスマ”や土木技術者が敗北することが決定づけられているわけでは決してない。以上の解釈を通じても明らかにされた、全てが「水平化」され、「情熱のない時代」を迎えた現代日本の憂うべき状況の中にあってもなお、快活に振る舞い続ける精神——、それこそが、公共に奉仕することを決意した者に求められる精神の有り様であるに違いない。斎藤氏は言う、

「もう限界だと自分で思いながらもね、…死ぬまで頑張っ
てやろうかなと。」

土木技術者もまた、こうした精神の有り様があってはじめて、為すべき築土構木を成し遂げる可能性の幾ばくか

を手に入れることができるに違いないのである。

謝辞：インタビューをお引き受け頂きました斎藤文夫氏、加藤文男氏、船木上次氏の各氏より、これまでのご経験・ご体験について大変熱心にご教示頂きました。各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意を表します。

脚注

- [1] この立場は、ヒューム(2004)¹⁷⁾が重視した「公平な観察者」の立場とも呼べるものである。
- [2] それは、さながら共同関係においてお互いに協力しあう中で相手が理解されることに見られるような、それ自体実践的意味合いを含んだ行為であると考えられる。
- [3] シュライエルマッハー(1984)¹⁸⁾は「語る者が目の前にいること、彼の精神的存在の全体が賭けられているような生き生きとした表現、ここで思想が共同生活の中で展開されていくさま、これらすべて」が「生の瞬間」に対する理解を促すことを指摘している。本研究の目指すところも、そうした記述行為であると言える。
- [4] この様な「物語」を通じた思想の伝染と、それが人間行動を活性化する重要な契機になり得ることについては、社会心理学¹⁹⁾や近年では経済学の分野²⁰⁾においても指摘されているところである。
- [5] 以上の「独立自尊」の精神については川端(2007)²¹⁾に詳しい。
- [6] 形式的には、「弁証法」とは、ある「命題」(テーゼ)とそれと矛盾する「反命題」(アンチテーゼ)に対して、その両者を本質的に総合した命題である「合」(ジンテーゼ)を得ようとする方法論を指す。
- [7] このことについて、チェスタトン(1905)²²⁾は、「(善き伝統たる)正統はいわば荒れ狂って疾走する馬を御す人の平衡だったのだ」と指摘している。同様に、西部(2000)²³⁾は、「伝統の精髓は何かというと、平衡感覚である」と指摘している。
- [8] ちなみに、進化論の分野において、集団内の利他的傾向(あるいは、集団全体の利益に配慮する傾向)が低下し、利己的傾向(個人の利益に配慮する傾向)が増進した結果、集団全体の活力が低下し、その集団が淘汰される(滅亡する)現象は「集団淘汰」と呼ばれている(c.f., Sober & Wilson, 1998²⁴⁾)。そして、藤井(2009)²⁵⁾は、そうした集団淘汰原理が、集落や街、そして、国家や文明の崩壊に共通する本質的原理であることを指摘している。本文の記述は、斎藤氏、加藤氏、船木氏の各氏が、それぞれの地域を

一つの「集合体」と捉え、それに対する「集団淘汰」の圧力を肌身で感じておられたという可能性を示唆するものであるとも言える。

[9] キルケゴールは、「情熱の時代」においては、「英雄」は「目立つ存在」として人々から讃嘆を浴びる一方で、「水平化の時代」においては、彼らは「目立たない存在」として人々から讃嘆を浴びないばかりか、「妬み」をも買うと述べており、以下のような比喩的な描写によって両者を対比している。

「これが情熱的な時代であれば、そんな（生命を落とす危険のある）沖合まであえて出かけていく勇者は大衆の喝采を博することだろう。大衆はその勇者の身になって、またその勇者とともに、決死の決断に身ぶるいすることであろう。その勇者が沈没したら、大衆は勇者を哀惜することだろう。もしその勇者が宝石を手に入れたとしたら、大衆は彼を神のごとく崇めることだろう。ところが情熱のない反省的な時代にあつては、事情はまったく違ってこよう。

“あんな沖のほうまで危険を冒して出て行くなんて、骨折り損というものさ。だいいち、愚かで滑稽だよ”とみんなが異口同音に言い、分別顔をしてお互いの賢明さをお互いに賞賛し合うことだろう。」¹⁶⁾

参考文献

- 1) 羽鳥剛史, 藤井聡: 地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討: 階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する理論的分析, 社会心理学研究, 24 (2), 87-97, 2008.
- 2) 国土交通省: 『観光カリスマ百選』, 2005.
http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha0501/010318_4.html
- 3) ニーチェ(著), 木場深定(訳): 善悪の彼岸, 岩波文庫, 1970.
- 4) デイルタイ(著), 久野昭(訳): 解釈学の成立, 以文社, 1981.
- 5) ボルノー(著), 西村皓, 森田孝(監訳): 解釈学研究, 玉川大学出版部, 1991.

- 6) ギデンズ(著), 松尾精文, 藤井達也, 小幡正敏(訳): 社会学の新しい方法規準—理解社会学の共感的批判, 而立書房, 2000.
- 7) 大川崎宿祭り実行委員会: 2001東海道宿駅制定四百周年記念大川崎宿祭り記念誌, 2002.
- 8) (社)日本観光協会(編): 観光カリスマ: 地域活性化の知恵, 学芸出版社, 2005.
- 9) 著者不明: 清里メルヘン環境研究, ACROSS, 10月号, 1988.
- 10) 船木上次: 清里バレー 夢追い20年, 読売新聞, 週末寸言, 2009年8月1日.
- 11) 山梨日日新聞, 風林火山, 2009年7月1日.
- 12) 西部邁: 思想の英雄たち, 文藝春秋, 1996.
- 13) プラトン(著), 藤沢令夫(訳): 国家, 岩波文庫, 1971.
- 14) ヤスパース(著), 草薙正夫(訳): 哲学入門, 新潮文庫, 1954.
- 15) 福沢諭吉(著): 福沢諭吉選集(第3巻), 岩波書店, 1980.
- 16) キルケゴール(著), 斎藤伸治(訳): 現代の批判, 岩波文庫, 1981.
- 17) ヒューム(著), 斎藤繁雄, 一ノ瀬正樹(訳): 人間知性研究一付・人間本性論摘要, 法政大学出版局, 2004.
- 18) シュライエルマッハー(著), 久野昭, 天野雅郎(訳): 解釈学の構想, 以文社, 1984.
- 19) Schank, R.G., & Abelson, R.P.: *Scripts, Plans, Goals and Understanding*. New York: Wiley, 1977.
- 20) アカロフ, シラー(著), 山形造生(訳): アニマル・スピリット, 2009.
- 21) 川端祐一郎: 「独立自尊」はなぜ必要なのか, 塾生通信, 20, pp.1-4, 2007.
- 22) チェスタトン(著), 安西徹雄(訳): 正統とは何か, 春秋社, 1995.
- 23) 西部邁: 国民の道徳, 産経新聞社, 2000.
- 24) Sober, E., & Wilson, D.S.: *Unto others: The evolution and psychology of unselfish behavior*. Cambridge, Harvard University Press, 1998.
- 25) 藤井聡: なぜ正直者は得をするのか, 幻冬舎, 2009.

(2009.11.1 受付)

A HERMENEUTICAL STUDY ON VITALITY OF “REGIONAL CHARISMAS”: NARRATION OF “CHARISMAS OF TOURISM” BASED ON INTERVIEW SURVEY

Tsuyoshi HATORI, Satoshi FUJII and Tetsushi SUMINAGA

As suggested from the case of “the 100 charismas of tourism”, there are many real-world examples indicating that local community has been vitalized through voluntary contributions by one or a few people who have exerted considerable energies and efforts to solve local problems. This paper pointed out the importance of an hermeneutical approach to understand vitalities of such “charismas”. Then, based of this approach, the paper described the practices of “charismas” from an interview survey in order to understand their vitalities to volunteer for local community.

「川越まちづくり」の物語描写研究 ～「蔵の町並み」の保存に向けたまちづくり実践～

澤崎 貴則¹・藤井 聡²・羽鳥 剛史³・長谷川 大貴⁴

¹学生員 京都大学大学院学生 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:sawasaki@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³正会員 東京工業大学大学院助教 理工学研究科土木工学専攻 (〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1)
E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp

⁴学生員 京都大学大学院学生 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:hasegawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

近年、中心市街地の活力低下等が問題となっている中で、町の活気を取り戻すというような事例も見られる。こうした成功事例に着目し、如何にしてその成功が導かれたのかについての一般的知見を得ることは、今後のまちづくりにおいて有益である。その知見を得る方法として、これまでは定量的な、非精神的な分析である「自然科学的方法論」が用いられてきたが、まちづくりに関わった人々の思いを理解するため、“物語”を解釈するという「解釈学的方法論」を用いる。本研究では、まちづくりの成功事例として挙げられる埼玉県川越市を対象として、まちづくりの様々な関係者にインタビューを行う。そして、それらを通じて“物語”を構成し、その解釈によって「川越まちづくり」が成功に至った要因を論ずる。

Key Words : city planning, narrative, interview survey, hermeneutical study

1. 研究の背景と目的

近年、大都市への集中やモータリゼーションの進展等を背景として、多くの都市において中心市街地の活力低下が問題となっている。そうした中、住民自らが考え、行政等に働きかけ、活気を取り戻すというような「まちづくり」の成功事例もいくつか報告されている。こうした成功事例において「如何にしてその成功が導かれたのか」という一般的な知見を得ることは、様々な地域における今後のまちづくりの取り組みを成功へと導く上で、有益であると期待される。

さてここで、そうしたまちづくりの成功事例について一般的知見を得る典型的な方法として「自然科学的方法論」がある。この方法論では、1つや2つではなく、様々な成功事例をデータとして網羅的に収集し、それらを総合的に(場合によっては統計的に)分析することを通じて一般的な知見を抽出するという手続きが必要となる。そして、そこから得られる一般的了解とは、「まちづくりの成功を導くメカニズム」と、そのメカニズムよ

り示唆される「まちづくりの成功を“結果”として導く“原因”」である。しかしながら「自然科学」の対象は一般に、天体や物質等の「非精神的」なものである。それ故、そうした方法論が「精神的」なものに対して採用できるか否かについては、議論の分かれるところである¹⁾²⁾³⁾。

一方で、哲学の一領域である「解釈学」では、人間精神を理解する上で必要なのは「因果関係」ではなく「解釈」である、ということが主張されている。この解釈学ではまず、一切の人間精神の産物を“経験の表現”として捉える。そして、その経験の表現を通じてその背後にある“人間精神”について何かを了解するためには、その経験の表現に対する“解釈”が不可欠であるという立場に立つ。例えばデイルタイは、経験とは、思考や行為とは異なり、環境、目的、手段、意図を包括的に含んでいる、と指摘している。そして、その経験についての語られる言説、あるいは“物語”(narrative)を“解釈”することを通じて、その経験に含まれる環境や目的、手段、意図などが包括的に了解されるということが論ぜら

れている。さらに、そうした解釈において重要となるのは、その言説や物語に対して“自己移入”を行い、「その物語の中を生きる」事なのだと言われている。そうすることではじめて、語り手の思考や感情のみならず、彼等が意識していない深い精神的な事柄までも取り出す事が可能となるのである⁴⁾。

また、価値観や信念を含む個人個人のアイデンティティは所属するコミュニティ内での“共有された物語”の影響を受ける事が指摘されている。そして、コミュニティ内における“共有された物語”もまた、個人個人の語る“物語”に影響を受ける事が指摘されている⁵⁾。そのため、コミュニティにおける様々な活動に関する知見を得る為には、コミュニティ内で活動する人々の“物語”を集積・解釈し、地域の“共有された物語”について理解を深める事が必要不可欠であると考えられる。実際、地域の“物語”を集積し“共有された物語”を抽出し、地域の将来像を描く一助にしようと試みる研究もなされている⁷⁾。さらには、“物語”を聞くことによって、さもすれば伝承されず消えてしまうような過去の重要な出来事に関する知見を得る事が可能となるのである⁸⁾。

こうした「解釈学的方法論」は、一つの一般的了解を抽出するにあたって、先述の「自然科学的方法論」とは異なり、必ずしも多様な事例を包括的に分析することを要請しない。むしろ、包括的分析を拒絶し、徹底的に特定の一つの経験、あるいはその表現の解釈を試みることを通じて、一般的了解を得ようとする。なぜなら、一人の人間が同時に複数の人生を生きることが不可能であり、いずれの時点においても一人の人生をしか生き得ないのと同様に、デュルタイが言うように自己移入を行い、その中を生きることができる物語は、それぞれの時点においては特定のものに限定しなければならぬからである¹⁾。それ故、まちづくりの成功事例について解釈学的方法論によって一般的了解を得るためには、特定のまちづくり事例を選定することが必然的に求められる。

以上の議論に基づいて、まちづくり成功事例として、様々な文献で、あるいは専門家からも取り上げられることが多い埼玉県川越市を選定する。そして、川越のまちづくりに関わった様々な関係者へのインタビューを通じて、まちづくりに関する“物語”を収集し、それらの物語をつなぎ合わせるという形の著者の解釈行為を経ることで、「川越まちづくり」の物語を改めて構成する事を試みる。本稿ではこうした解釈学的方法論に基づいてまちづくりについての一般的了解を得ることを研究目的とする。

なお、こうしたまちづくりの成功事例についての物語的記述は、住民達がそのまちづくりに付与した思いや、問題に直面した際に感じた葛藤、そしてそれを乗り越えていく決然たる意志など、住民達の人間精神を理解し、

疑似的に体験する事を支援する可能性が期待されることが、従来の解釈学研究において示唆されている¹⁾。そしてさらに、このような擬似的な体験を通して、人々が自発的に地域に資する行動をとる傾向を促進することが可能であることが、民俗学研究でも指摘されている⁹⁾。

2. 川越のまちづくりの概要

川越市は現在、人口約 34 万人の中核都市であるとともに、「小江戸」と呼ばれる観光地でもある。この町には昔から商業地として栄えた一番街通りがあり、その通りの両端に古くから残る蔵造りの町並みが広がり、国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも指定されている。この蔵造りの町並みを保全していく活動がこれまで盛んに行われてきた。

1970 年代は、商店街の衰退やマンション建設がなされるという状況の中で、専門家による町並み保存の提言や、地元有志、青年会議所による保存運動が行われていた。そして、一番街商店街の活性化に向けて 1983 年に市民団体「川越蔵の会」が設立され、中小企業庁によるコミュニティ・マート構想による事業調査を行った。この調査に基づいて、1987 年には「町並み委員会」が組織され、独自に「町づくり規範」という自主規制を作成し、個店改装の指導を行うなど、町並みの保全活動を進めてきた。

その後、1992 年に一番街通りの電線地中化が行われたほか、一番街周辺の街路整備（後述する歴みち事業）が行われるなど、町の景観を良くしようと努力がなされてきた¹⁰⁾。そして、旧城下町の自治会から組織される「十カ町会」や商店街から町並み保存に対する要望書を受けて、1999 年に「伝統的建造物群保存地区（伝建地区）」に指定されるに至る。

こうした活動が功を奏し、観光客は年々増加し、1989 年は 338 万人であった観光客数が 2009 年には 627 万人にまで増加している¹¹⁾。

3. 川越まちづくりの物語描写に向けて

(1) それぞれの視点からの物語描写とその横断的再解釈

こうした川越まちづくりの事実に基づく経緯は、それを解釈するにあたって重要な情報を提供しうるものであるが、それをいくら積み重ねても、それだけでは必ずしもまちづくりの実態を表現することはできない¹²⁾。1. で述べた解釈学的論考のように、まちづくりというものを理解するためには、“物語”を構成し、整理することが

必要である。

ただし、物語には幾重の“視点”が存在する¹³⁾。そして“まちづくり”の物語には、様々な人々が関わるものであり、その物語の視点の多様性、重層性は、とりわけ大きなものとなる。については本研究では、川越のまちづくりに実際に関わった人々から直接間接に伺ったお話しを基に、著者らが、川越まちづくりの展開の中でとりわけ重要な、互いに異なる役割を担ってこられたと感じた方々を取り上げることとした。そして、その方々の視点からの、それぞれの「川越まちづくりの物語」についてお話しを伺い、その上で、改めて著者らの立場から描写することとしたい。そうした個別の物語は、それぞれの人々にとっての「川越まちづくり」に対する個別解釈と云うものであるが、その個別解釈を、著者らの立場から改めて“再解釈”をすることを通じて、それぞれについて描写していくこととしたい（図-1参照）。

さらに本研究では、そうしたそれぞれの個別の物語を横断的に“再解釈”することを通じて、“まちづくり”の展開に資する、より一般的な了解を得ることとしたい。

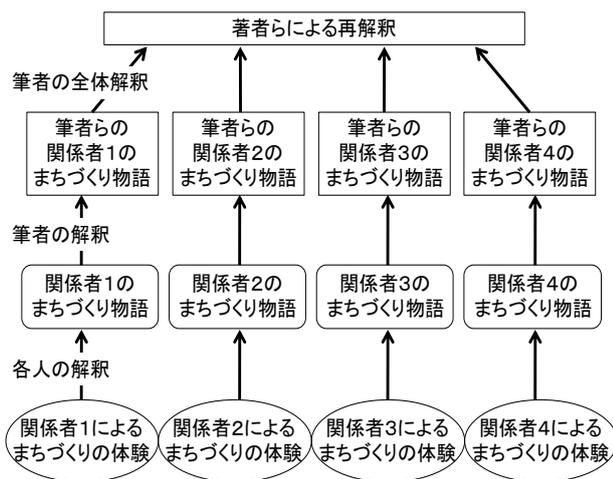


図-1 物語描写の構造

(2) 川越まちづくりを支えた4つの役割

筆者らは、川越まちづくりの物語描写を行うにあたって、まずは川越市役所の方々に、川越まちづくりについて、どの方にお話しをお伺いするとよいかという点を尋ねたところ、異口同音に二人の人物の名が挙げられた。一人が川越のまちの象徴的存在である「蔵」の保存とそれを活用したまちづくりに尽力してきた“町衆”の一人、可児一男氏（カニヤ本店社長）であった。そしてもう一名は、川越の“町衆”であると共に、市役所職員として、川越まちづくりに尽力してきた植松久夫氏（川越市役所広報監）であった。

この御両名は、川越のまちに住まう直接の“部内者”

として、それぞれ“民”と“官”という役割を担いつつ川越まちづくりを進めた中心的な人物であったが、この御両名に加えて、川越まちづくりの展開の中で、重要な役割を担った、もう二名の名前が浮かび上がった。その二名の方々はいずれも、川越に住まう部内者ではなく、川越外に住む“部外者”であるが、川越のまちづくりの展開にあたって、それぞれ異なった“専門”の立場から、非常に重要な役割を担った方々であった。

一人は、“まちづくりの専門家”として、蔵の町並みの保存と整備のために様々な知的刺激を提供し続けた福川裕一氏（千葉大学大学院自然科学研究科教授）であった。そしてもう一名が、川越の町並みの中心軸を形成している“道路”と、その道路それを含めた“都市計画”の専門家である佐々木政雄氏（株式会社アトリエ 74 建築都市計画研究所代表取締役）であった。福川氏は、川越まちづくりを語る上で欠かせない「町づくり規範」の策定と運営にあたって極めて重要な役割を担った専門家である一方で、佐々木氏は、同じく川越まちづくりを語る上で欠かせない「伝統的建造物群保存地区（伝建地区）指定」において決定的に重要な役割を担った、道路交通や都市計画に関する専門家であった。

言うまでもなく、川越まちづくりには、以上に述べた四名以外にも実に様々な方々が関わりながら進展してきたものであるが、以上の四名は、川越まちづくりの展開にあたって欠くべからざる四つの役割を担った人々であった。その四つの役割とは、官（植松氏）と民（可児氏）の立場からまちづくりを支えた“川越の内部の二つの役割”と、その川越まちづくりを“まちづくり専門家”（福川氏）として、そして“道路・都市計画の専門家”（佐々木氏）として支援した“川越の外部の二つの役割”である。

それでは、川越まちづくりにおいてこの部内・部外の四つの役割をそれぞれの立場で担った四人の方々から伺った話を基に、それぞれの立場からの“川越まちづくりの物語”を描写していくこととしたい。

4. 川越まちづくりの物語描写

(1) まちづくりを支えた町衆 可児一男氏

可児一男氏がまだ幼かった 1940 年代頃の一歩街通りは、人通りが多く賑わっており、例えば路上には将棋をする大人達の姿などもよく見られたという。こうした情景を思い起こしつつ、可児氏は「子どもの頃は、のんびりしてましたから、良いまちでしたよ」と、当時の川越への郷愁を込めて語る。

しかし、その光景は、一番街の南に現在の川越駅が建設されたことを契機に、一転する。1960 年代半ばにな

ると、一番街にあった大型商店が、売り場面積が広げられない等の理由により駅前へ移っていき、それにとまってまちの賑わいが南の駅周辺へと移り、一番街周辺は徐々に衰退の方向に向かうこととなった。可児氏は、1965～75年頃の一歩通り風景は、立ち並ぶ商店のシャッターは閉まり、車が通りすぎるだけで歩行者がいない様な、“閑散たる状況”であったと当時を振り返る。

そしてさらに1970年代には、蔵が姿を消していくこととなる。蔵が生活にとって不便であることや、当時は洋風建築を建てる風潮にあったこと等を背景に、蔵の持ち主が変わっていったり、代替わりする際に蔵の“取り壊し”が進んでいったのである。そして挙げ句には、以前に比べ半分程度にまで、蔵は減っていったという。可児氏はそうした蔵が姿を消していったのは、川越に住まう人々が、その蔵の重要性に気付いていなかったことが原因なのではないかと、当時を振り返る。川越に住む人々にとって、蔵があることが当たり前であると同時に、何か古くさいものであるとすら認識していたのではないかと。今でこそ蔵は川越のまちの財産だという認識が広まっているようにも思われるが、当時の人々にとっては、そんな特別なものでも何でもなかったのだ。

しかし、そんな中、一番街通りが衰退し、昔ながらの蔵が姿を消していく、そしてそれにも関わらず、それを当たり前のことと住民は受け入れている、という状況に、可児氏は強い危機感を抱いていたという。

そんな危機感を抱いていた折、可児氏に、川越まちづくりに運命的に巻き込まれていく小さなきっかけが訪れる。それは、川越市が制作した、蔵造りの町並みを保存する取り組みを記録した番組が「地方の時代映像祭」にて受賞した折りに支給された“賞金”の使い道の相談を、川越市の植松氏から受けたことであった（この辺りの経緯については、次節の植松氏から伺った話を描写する際に、また改めて触れることとしたい）。この時、植松氏との相談の中で、これをきっかけに、数名の町衆と共に、蔵を保存することを目的とした「川越蔵の会」を設立しようじゃないかということになる。そして、その際、たまたま最年長者であった可児氏が、その初代会長を務めることとなったのである。

もちろん、この川越蔵の会を設立することにしても、その初代会長を引き受けたということも、可児氏が“たまたま”と言うように、偶然と言えば偶然の出来事である。しかし、可児氏が言う「川越のまちを何とかしなければ」という危機感を、当時の可児氏が一切持っていなかったのだとすれば、蔵の会の設立に巻き込まれることなどあり得るべくもない。実際、可児氏は「自分たちでやろう、人に頼ってたんじゃダメなんじゃないか・・・」という思いを、その蔵の会の設立当初、強く持っていたのだと語る。

さて、そうした思いを旨に、可児氏は蔵の会の設立以後、蔵の町並みを守り、そして改善していく様々な活動に精力的に尽力していくこととなる。勉強会を開き、ブレインストーミングを行い、素晴らしい町並みが余所にあると聞けば、現地について視察を行う。そうする内に、仲間も増えていった。そしてどうしたら町が活性化するかを皆で考えていった。当時は、皆が熱心に言いたいことを言って議論し合うような、活発な雰囲気が、蔵の会にはあったのだという。

さて、そんな蔵の会の活動を進めるさなか、また次の大きな転機に向けてのきっかけが、可児氏に訪れる。ある時、可児氏は日経流通新聞の記事を見ていたとき、「コミュニティ・マート構想モデル事業」の存在を知ったのである。この事業は国の補助制度で、衰退しつつある旧来の商店街を暮らしの広場として整備・再生することを狙いとするもの¹⁴であった。可児氏はこの事業を川越でも実現したいという思いを抱く。そうしたことを思いついてからの可児氏の行動は早い。まさに機を見て敏、地元の代議士にすぐに相談したところ、その代議士は可児氏が、その事業の担当の通産省の大臣室に直接相談に行く機会を調整した。そして通産省の大臣室にまで足を運び、そこで川越の状況を話し、事業の採択を訴えた。その結果、通産省は川越の活動に関心を抱き、その事業採択を省内で決めることとなった。そしてその話が通産省中小企業庁からトップダウンで埼玉県庁を経て、川越市役所に伝わるということを通じて、各種の調整が図られ、最終的に事業決定に至ったのである。

さて、この商店街活性化を目的とするコミュニティ・マート構想では、現在も川越のまちづくりにおいて大きな役割を担い続けている「町並み委員会」の設立や「町づくり規範」の作成へと繋がることとなる。また、川越の一番街通りの景観改善に大きく寄与した電線地中化についても言及されるものとなっていた。つまり、この事業は、まさに今日に至る川越の町並み保全活動の基礎を築く重要な役割を担うものとなったのであった。

この様に、可児氏が“偶然”にも、新聞でこの事業の存在を知ったということもきっかけに、住民と行政（川越市）との町並み保全活動を活性化させ、町の活性化へと繋がっていったのである。ただし、それは一面において“偶然”であったとしても、反面に於いてそれは“必然”であったという事もできるように思われる。川越蔵の会の設立とその会長就任の時と同じように、常に川越まちづくりにかける思いを常に携えていたからこそ、その偶然のチャンスを見逃さず、機を見て敏なる判断と行動に結びついたからに違いないからである。

さて、このコミュニティ・マート構想をきっかけに組織化されていった「町並み委員会」であるが、可児氏は現在でも、その委員長を務めている。この委員会では、

同じく、コミュニティ・マート構想を契機に独自に作成された「町づくり規範」に則って、景観上の変更について助言、提案を行うものである。

著者らは、そんな委員会に参加させてもらったことがある。委員会には、商店街や自治会、学識者など、多様なメンバーが参加されていた。そして委員会では、多様な論点が議論され、そして場合によっては、対立するような意見や議論がなされることもあるようであった。しかしそんな対立があってもなお、一つ一つの意見を丁寧に耳を傾け、皆の意見を一つの方向性にまとめていこうとする姿が印象的であった。おそらくは著者らが知らないような様々な問題や課題が、川越のまちづくりにおいてはまだまだあるのだろう。しかし、可児氏の姿には、そうした様々な矛盾や問題の一つ一つを、丁寧に解きほぐしていこうとする強い意志を感じた。こうした強い意志に基づく、ねばり強い調整を長年にわたって図られてきたことが、町並み景観の整備、ひいてはまちづくり全体を支えてきたのだと、感じずにはいられなかった。

そして言うまでもなく、そう感じているのは、たった一時、川越まちづくりの現場を垣間見た著者らだけではないようである。町並み委員会の終了後、そこに出席していたメンバーと雑談をしていたところ、「この会も、このまちづくりの取り組みも、みんな可児さんがねばり強くやってきた事を知っている。可児さんがいれば、まとまらない様な話も、徐々にまとまっていくんです」と語っていた。

町衆のリーダー的存在として、皆の納得を少しずつ少しずつ引き出し、まちづくりを一步一步前に進めてきた可児氏——、この人物の周りの人々を引きつける真摯な真剣さ、そしてそれに裏打ちされた魅力とカリスマ性なくして、今の川越は今の川越たり得なかったに違いない。

(2) 町衆として役所勤めを果たす 植松久夫氏

幼少の頃（1960年当時）に東京から川越に引っ越してきた植松久夫氏は、当時の一番街商店街の寂れた風景を目にして面白みのない町のように感じたらしい。そういう第一印象のせいもあるのだろう、若い頃は川越に対する関心はずっと薄かったとのことである。つまりご本人曰く、荒廃する川越の文化に関心も無ければ、その衰微に気づいてもいない大多数の川越住民の一人、それが、若い頃の植松氏であつたらしい。しかし、縁あって川越市役所で勤めるようになって以降、仕事を通じて出会った一番街の人々の熱意に心を動かされ、川越を良い町にしていきたいという思いを次第に強めていくこととなる。

植松氏が市で勤めだして間もなかった1970年代は、蔵の保存や伝統的な町並みを保全しようとする傾向が専門家を中心に高まっていたらしい。しかし、当の蔵に住

む住民自身の思いはそれとは対照的であつたとのことである。可児氏も指摘していたが、当時の住民は蔵の文化的価値や、その保存に対してあまり関心を持ってはいなかったようである。さらに言えば、蔵をポジティブなものとして捉えるというよりはむしろ、ネガティブなものとして捉える傾きさえあつたようである。つまり、「外部」の人々は、蔵造りは夏は涼しく冬は暖かいからいいよねとは言うものの、実際に暮らす「内部」の人々にとっては、蔵の中は薄暗く、クーラーも簡単に設置するわけにはいかないような状況で、蔵に対して良い印象を持っていなかったとのことである。だから、保存を訴えていたのは主に蔵の周辺部あるいは外部の文化財保存派の人々であり、「（蔵に住む）地元商店主は保存運動に参加しなかった」という。

とはいえ、外部の人々からの働きかけによって、住民側も徐々に蔵の価値を見直していくようになり、蔵を保存しなければとの認識が住民の間でも共有されていったのではないかと、と当時を回想されていた（このあたりの経緯は、後に述べる福川氏の節にて詳しく述べることにしたい）。

そんな折、川越市は、1981年に川越のある蔵造り商家を文化財に指定したことを受け、その取り組みを紹介する番組を作成した。植松氏もその作成に携わったこの番組は、全国から集められた各地域の取り組みの映像を集める「地方の時代映像祭」にて、賞を受賞するという幸運に恵まれた。

この時、「賞金」が出されたのだが、その使い道が議論となった。市では賞金を「雑収入」に充てようという考えが一般的であつたが、植松氏は、せっかく蔵造りの番組に対して賞金をもらったのだから、蔵の保存に取り組んできた地元の方々に還元すべきだと主張した。そして、賞金の受け皿となる組織を作るため、のちの「川越蔵の会」設立を、可児氏をはじめとした地元の方々と検討することとなった。

植松氏がこの川越時蔵の会を設立する方向へと調整を図った背景には、蔵の町並みが壊れていくことに対する危機感を持っていたことが大きい。当時、一番街周辺でマンション建設の話があつた。蔵の保存を訴える周辺住民はそのマンション建設に反対したものの、結局建設されることとなってしまった。植松氏はこの時、マンション建設を阻止することが出来ずに挫折感を感じていた住民に、もう一度頑張ろうと声をかけたいという思いがあつたそうである。そして、その思いに、一人の町衆として川越の行く末を憂っていた可児氏が応えることとなったのである。

この蔵の会の設立が、その後の川越のまちづくりの展開を決定づけていった大きな転機であつたことは、先の節に描写した通りである。つまり、「もらった賞金を何

とかする」という小さなきっかけが、植松氏と可児氏の共同作業をもたらし、それが、今の川越のまちの有り様に重大な影響を与えることとなったのである。

この蔵の会において植松氏は、日中の市の業務を終えてから活動に携わっていくこととなる。つまり、植松氏にとって蔵の会の取り組みは、市の職員としての活動ではなく、あくまでも植松氏一個人、一人の「町衆」の活動であったのである。ただし、植松氏はそうした「一人の町衆としての思い」を胸に秘めつつ、現実の業務の中では、その思いを実現するために求められる「行政官」として自分の責務を果たそうと画策する。

そうした言わば“半官半民”の活動姿勢は、植松氏のまちづくり活動の理念にも表れている。植松氏は、持続的な町並み保存運動を展開するには次の三点が重要となる、ということを一貫して認識し、主張し続けているという。第一にまちづくりは住民主体でなければならない、第二にまちなみ景観の保存はただ単に保存だけを目的としてはならない、商業活性化を前提としてそれを通して結果としてまちなみ景観が保存されるような展開を目指さなければならない、そして第三に、そうしたまちづくりを展開するためのプラットフォームとして財団の設立が必要である、という三点である。

こうした認識は、「川越のまち」に対する真摯なる町衆としての深く熱い思いの下、その思いを実現するために必要な条件を行政官として考えるという姿勢あつてのことだと言えるだろう。いわば、植松氏はそうした姿勢で思い悩んだ末に、如何にそれが専門家にとって文化的な意義の高い蔵やまちなみであったとしても、そこに住まう川越の住民が、その保全に主体的に関わらない限り、それが長きにわたって保存されていくことなどあり得ないであろうという重要な認識に辿り着いたのである。そして住民がそれに主体的に関わるためには、ただ単に「観光を重視する」という目的や「文化財は大切だ」という理念を掲げるだけでは、川越の人々の心が動かされることはない、という点にも、思いが至ることとなったのである。

こうした発想は、ただ単に、川越の街を残したいと考えるだけではなかなか生まれるものではなからう。あくまでも行政官として、“落としどころ”を探りつつ、ねばり強く、具体的にまちづくりを進めるという冷静な客観認識があつてはじめて、こうした理念提唱に結びついたことができるだろう。そして、こうした植松氏の思いが実際のかたちへと結びつくようにして、「川越蔵の会」の設立を通じてはじめて、蔵の保存に向けた運動の先頭に行政や部外の専門家ではなく「商店街の人々」が立つこととなる。

さて、川越蔵の会設立後に行われたコミュニティ・マーケット構想モデル事業では、一番街通りの電線地中化が検

討された。これは、電線や電柱が、蔵造りの町並みにそぐわないことや、川越まつりの山車が電線に引っかかるなどして邪魔であったことが、その要因としてあつた。しかし、莫大な費用がかかることや、一番街通りが県道であり、埼玉県と川越市の間で道路計画の意見が折り合わない等の背景があり、電線地中化が進まない状況がしばらく続いていた。

そんな折、埼玉県から川越市に古くなった一番街通りの下水管工事の管理要請があり、県道を市が管理するという機会が巡ってきた。その時、電線地中化を行うには絶好のチャンスと感じた植松氏は、この機会を逃すまいと、関係事業者とともに電線地中化を検討する。この時、植松氏が市の道路管理課に配属されており、かつ、道路占用許可を取りに来る東京電力やN T Tの方々人間関係を築いていたことが、協議会の設立や議論の円滑化に大いに役立つこととなる。さらに、電線を地中化するにあたって、キュービクルの置き場を民地に提供してもらう必要があつたが、ここでも植松氏の住民との人脈が活き、住民の協力を得ながら、最終的に電線地中化事業が完成する。

このように、一番街通りの電線地中化が実現する背景には、植松氏の欠くべからざる貢献があつたものと言える。植松氏は「たまたまそういう時期にタイミング良く・・・あちこちをくっつけて合わせるようなポジションにいた」と語っておられたが、この事業は、植松氏がより良いまちづくりを実現するために、来るべき「タイミング」を待ち“機を見て敏”に行動した結果、成しえたものだったと言えるだろう。

その後、川越市は蔵造りの町並みを守るために、伝建地区の指定を目指す（このあたりについては、福川氏、佐々木氏からの節にて詳しく述べることにしたい）、ここでも、植松氏が住民との協議において積極的な役割を担うこととなる。この頃、市の要請により、植松氏が伝建を所管する部署に“呼ばれる”という人事があつた（これは、伝建地区指定において住民との協議が必要であり、植松氏の住民との折衝能力を評価したためと考えられ、市の植松氏に対する期待ぶりを窺い知ることができよう）。伝建地区の指定を受けるためには各々の地権者の同意が必要であつたが、植松氏は市の期待に応えるようにして、地権者の同意を得るために地域をまわったそうである。

この様に、“一人の町衆”として“行政官”の職責にあつた植松氏は、蔵の会の設立、電柱の地中化、そして、伝統地区指定といった、川越まちづくりにおける重要なそれぞれのターニングポイントにおいて決定的に重要な役割を担つたのである。こうした町衆としての行政官、植松氏の働きがなくなると、今の川越のまちは、今の川越たり得なかつたに違いない。

(3) 川越の町並みを見守り続ける専門家 福川裕一氏

福川裕一氏が川越に関わるようになったのは、大学院の博士課程のときに、川越を対象に行われた日本建築学会のコンペに応募したことがきっかけであったという。その後初めて仕事として川越に関わったのは、博士課程を修了した後に、明治大学工学部建築学科の助手に勤務していた頃、1981年度に行われた「デザインコード調査」の時であった。この調査は、歴史的な町並みの周囲でマンション建設が進められつつあった1970年代後半に、町並み保存の重要性を認識しつつあった川越市が、マンション建設が進行する現状を打開するために、環境文化研究所に委託したものであった。その調査の委員会の委員長を務めたのが、福川氏の先生に当たる大谷幸夫氏（当時、東京大学工学部都市工学科教授）であり、福川氏もまた、この調査の委員会に委員として参画することとなったのである。

このデザインコード調査では、外観保存に限定されない環境維持のための仕組みの必要性や、町並みを単なる規制にとどめるべきではないこと、街区再編のあり方等が提言された¹⁵⁾。

この調査を通じて作成された「川越の町並みとデザインコード」は、結果的には住民の目に触れる機会はほとんど無く、お蔵入りとなってしまったらしい。

福川氏は、この調査で、市全体として積極的に取り組む姿勢が見られず、少なからず不満を抱いていたようである。そんな中、この調査を通じて福川氏は、「町はもっと磨けばよくなるだろう」と感じていたそうである。

その後、「蔵の会」に福川氏も参加し、可児氏をはじめ、住民や市職員等との交流を深め、彼らとともに川越のまちづくりの取り組みに、専門家として深く関わっていくこととなる。

そんな福川氏が、本格的に川越まちづくりに関わるようになったのは「コミュニティ・マート構想事業」に参加した時であった。この事業の立ち上がりの経緯は、可児氏のお話しを描写した節において述べているところであるが、この事業の中で、上記のデザインコード調査に専門家として参画していた福川氏が、重大な役割を果たすこととなる。

福川氏は、この事業に携わっていた当時には、週に何度も川越に足を運び、夜遅くまで話し合いを続けていたとのことである。話し合いは夜遅くまで及び、家に帰れなくなることもしばしばであったと言う。その中で、福川氏は、デザインコード調査の時から経験を踏まえ、一軒一軒の建築物のモデル的な設計を、それぞれの持ち主と話し合いながら手がけたという。

さて、こうしたデザインコード調査、コミュニティ・マート事業へと繋がっていった流れは、さらに「町づく

り規範」へと結実していくこととなる。

この「町づくり規範」は「町並み委員会」によって策定され、運営され続けているものであるが、技術的な部分は福川氏が中心となって作成したものであった。この規範は、人々の活動を強制的に“規制”しようとするものではなく、川越のまちにもともと備わる固有の価値を活かしつつ、人々のお互いの協力的な行動を促し、全体として価値の高いものが醸成されていくことを期するものであった¹⁶⁾。

この町づくり規範は、強制力がとりたててあるわけではなかったものの、町並みの建築物に関わる一人一人の、町並みの保全と改善に向けた協力的な行動を促すことに、大いに貢献しているとのことである。そして現在では市も、一番街周辺で建築行為を行う際には、町並み委員会に相談に行くよう促し、町づくり規範に基づいた設計が行われるよう指導をしているというようになったとのことである。

それだけ成功し、住民、商店からも大いに活用されている規範であるから、その策定にあたっては、さぞかし住民や商店の意見を十二分に反映したものであろうと思われるので、その旨を直接伺いしたところ、福川氏曰く、必ずしもそうではない、とのことであった。福川氏は、よい町並みを形成したい、という強い思いの下、そのために必要な規範を、あくまでも専門家として取りまとめた、とのことであった。

その規範作成の過程において、福川氏は建築家C.アレキサンダーの提唱する「パターンランゲージ」の考え方を採用している。この考え方は、町並み形成を考える上で採用される専門的概念の一つであるが、このコンセプトを採用することが川越の町並みを良質なものにすることに違いない、という揺るぎない専門家としての信念を、福川氏はお持ちのようであった。

ただし、福川氏は決して、川越とは無縁のところには存在する抽象概念を、ただただ川越に無作為に当てはめたわけでは決してなかった。上述のように、規範作成の時点においては、必ずしも住民の意見を直接援用した訳ではなかったとのことであるが、それはあくまでも、「直接的な意見」という次元においてのみである。既に上にも述べた様に、福川氏は川越の町並みを形成している一つ一つの建築物のモデル的な設計を、それぞれの持ち主とじっくりと話し合いながら手がけたという経験が、そのパターンランゲージというコンセプトに基づいて町づくり規範を、専門家として作成していく上で、決定的に重大な意味を担っていたとのことであった。そうした経験を通して得た川越の町並みに対する深い理解があったからこそ、町づくり規範を専門家として自信をもって提案することができたのであり、そして、それが実際に住民、商店主にも受け入れられるという成功を収めるに至

ったのである。

さて、こうした経緯を経てつくられた町づくり規範であるが、その運用においてもまた、様々な悩みがあるとのことであった。古い建物は残していく、ということが基本であるため、相対的には難しさはそれほど大きなものではないとのことである一方で、「新しく建てる」場合のデザインについてはなかなか難しさがあるとのことであった。実際に、「安易なものを造るとろくなものにならない」と語る福川氏は、周囲の蔵のようにただ黒く塗ればよいなどという表層的な発想で“似非蔵造り”の建築物が建てられている現状を問題視されていた。モダンな建築であっても、川越のまちに似つかわしいものは、あり得るはずなのであり、かつ、そういうものがあってはじめて、川越のまちは、よりよいものへと展開・進化していくに違いない。

しかし、そんな展開や進化は必ずしも容易なものではない。福川氏は言う、「意見も分かれるし、何が良いかこっちはわかんないこといっぱいだし…試行錯誤ですわね」。福川氏の言うこの「試行錯誤」は、デザインコード調査においても、コミュニティ・マート事業においても、そして、町づくり規範の作成においても常に繰り返されたのであろうと思わずにおれない。そうした試行錯誤が存在していたからこそ、週に何度も川越に足を向け、夜遅くまで話あわねばならなかったのであろうし、その果てに得たものだからこそ、町づくり規範の一つ一つのルールを、自信を持って提供しえたに違いないだろう。もし一遍の悩みも試行錯誤もなく、特定の専門知に対する信仰のみで何もかもを決めてしまうような“専門家”であったのなら、川越の町のかたちを決定づけるような「町づくり規範」を、提示しうることなど不可能であったに違いない。

繰り返しとなるが、福川氏がその策定にあたって中心的な役割を担った「町づくり規範」は、現在の川越の町並みに決定的な影響を与え続けているし、その影響は、川越まちづくりが続けられていく以上、継続していくであろうものである。そんな実行力ある町づくり規範がつけられた背景には、川越の町衆と行政の、可児氏や植松氏をはじめとする様々な方々の思い、そして、それに基づく蔵の会の設立やコミュニティ・マート事業等の展開があったことは間違いない。しかし、それが、良質な町並みを保全し発展させていくものたり得るためには、町並み保全についての「プロフェッショナル」の存在が不可欠であったに違いないのである。福川氏は、「蔵の会」に属し「町並み委員会」に属し、川越に足繁く通い、川越の様々な人々とじっくりと話し合い、一軒一軒の建築物に向き合い、川越のまちについて深く理解を少しずつ醸成させていきながらも、あくまでも、川越の町衆から一線を画す一人の「プロフェッショナル」として、川

越のまちに対峙し続けた。こうした川越のまちに対する絶妙な立場の取り方なくして、町づくり規範も、その実質的な効果の発揮もあり得なかったに違いないだろう。

川越のまちは、福川氏という、「まち」とに対するバランス感覚を持った、まちづくりに対する秀逸な専門知を携えた一人のプロフェッショナルなくして、今の発展はあり得なかったに違いない。

(4) 伝建地区指定を陰で支えた専門家 佐々木政雄氏

佐々木政雄氏は、建設コンサルタントに務める都市計画の専門家である。そして、佐々木氏は、単なる効率性や合理性を高めるような都市交通計画ではなく、歴史・伝統を重んじる都市交通計画が、本来の都市や地域に求められているに違いないという強い思いを持たれていたという。そうした思いから、伝建地区の保全整備を支援するために建設省が創設した「歴みち事業（歴史的地区環境整備街路事業）」¹⁷⁾にコンサルタントとして関わり、萩市や金沢市などの様々な都市にて、歴史的地区の整備計画に携わってきたとのことであった。

そんな中、植松氏を含む川越市の担当者が一番街の都市計画道路変更について佐々木氏のもとに相談に来られたのが、川越に関わるきっかけであった。

植松氏らが佐々木氏に相談に訪れたのは、当時の川越において、蔵の町並みの保全と都市計画決定とが互いに整合しておらず、いかに対処すべきか苦慮していたためであった。その不整合とは、次の様なものであった。

まず、前述したコミュニティ・マート構想事業では、その補助金を一番街通りの蔵の保存に充てる予定であった。それに加えて、当時、一番街の周辺でマンション建設計画がもちあがり、数棟が建設されてしまったことから、現状のままではマンション建設等によって歴史的な景観が損なわれるという危機感が、関係者の間で共有されていた。そしてそうした問題に対処すべく、蔵造りの町並みを「伝建地区」に指定すべきだという声が出てきていた。なお、「伝統的建造物群保存地区（伝建地区）」とは周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いものを保存するための地区を行政として指定する、という制度に裏付けられたものである。この地区の指定にあたっては、都市計画区域では都市計画法による地域地区の一つとして都市計画決定で行う必要があり、国の文化財として特に高い価値を有しているものは、市町村からの申し出に基づき、文化庁によって「重要伝統的建造物群保存地区」として選定される¹⁸⁾。

ところが、もともと一番街通りは道路幅が都市計画決定されており、その計画が実行されれば蔵は取り壊されることになっていた。そのため、将来壊されることが法的に定められているような蔵に、コミュニティ・マー

ト構想で盛り込まれた公的な補助金の拠出にせよ、伝建地区指定についても、法的に問題ありとされていた、とのことであった。こうした不整合があったが故に、蔵の保存のための公共支援も伝建地区指定の調整も頓挫してしまっていたのであった。

こうした背景から、蔵の町並みを保存していくための公的支援を展開するには、この不整合を何とか解消することがどうしても求められていたのであった。そしてその不整合の解消に向けた現実的な方策の一つが、「都市計画の変更」であった。

しかし、この都市計画の変更も容易なものではなかった。なぜなら、蔵を保存するために必要となる都市計画変更は、一旦決定した都市計画道路の道路幅員を「削減」という種類のものだったからである。当時、幅員を削減するような都市計画変更は日本国内でも前例がなく、前例踏襲主義が色濃い日本の都市計画行政においては、その都市計画変更は、極めて困難、あるいは、ほとんど不可能ではないかとすら思われていたのである。

さて、以上のような不整合を乗り越えて町並み保存をしていくためにどうすればいいのか、なかなか妙案が見つからなかったのである。いわば、「川越のまちづくり」という地域的活動が、「都市計画法」という日本国の行政的制度の存在と、直接対峙せざるを得なくなったのである。

ついては、川越市の職員は、まずは政府の文化庁の伝建地区の担当者に、この問題についてどのように調整を進めれば良いのかの相談に伺ったそうである。その時に、担当者は、この問題は「文化行政」のみに関わるものではなく、「都市計画行政」に直接関わるものであるから、その筋のプロフェッショナルに相談することが必要であろう、と助言されたそうである。そして、その時に、文化庁の担当者が紹介したのが、その担当者が萩市の歴史的地区における街路整備でともに仕事をしていた、佐々木氏だったのである。

川越市は、この助言を受けて、早速佐々木氏のところに相談に伺った。この時に、佐々木氏の所に相談に来られたのが、本稿でも紹介した植松氏を初めとする川越市の職員と、同じく本稿で紹介した福川氏の薫陶を受けたコンサルタントの方々であった。

こうした経緯をふまえると、歴史と伝統を重んじる都市交通計画が必要であると考え、そうした仕事を手がけていた佐々木氏と、同じく歴史と伝統を重んじる都市交通計画を進めていた川越市が関わることとなったのは、半ば必然的であったとも言えるであろう。

さて、この打ち合わせの席で、川越市の植松氏らは、これまでの経緯を説明し、都市計画道路の縮小変更がどうしても必要であり、そのためには、どうすれば良いかの助言を請うた。それを受けて、佐々木氏はまず、都

市計画道路の変更には、建設大臣の許可が不可欠であること、したがって、そのためには、建設省の同意を取り付けることが必要であること、さらには、そのためには、縮小変更が必要である論理を組み立てることが不可欠であることを助言されたとのことである。そしてさらに、そのための具体的な次の一手として、佐々木氏がこれまで関わってきた、文化庁と建設省が協働で事業を進める「歴みち調査」を、国の補助をもらいながら実施することを提案されたそうである。

川越市は早速このアドヴァイスを受けて、1985年度に「歴みち調査」を、佐々木氏にコンサルタントとして関わるかたちで実施することとなった。この調査では、一番街通りの計画変更をして、拡幅を伴わない道路整備の必要性が提起されるとともに、歩行者ネットワークの整備と、景観整備を進めるための景観条例の整備などが提案された。それと共に、一番街の交通量を削減するためにも、バイパスの整備が不可欠であることが主張された¹⁹。

ところでこのバイパス整備という提案は、一番街の交通量の削減のために、今も尚強く求められている程、川越のまちづくりにとって必要不可欠な要素なのであるが、こうした提案は、「文化行政」の議論だけでは提案されづらいものであると思われる。つまりやはり、川越のまちづくりは、あるいはより具体的に言うなら、伝建地区指定のためには、「文化行政」と「都市計画行政」の融合がどうしても求められていたのである。この歴みち調査は、その両行政の「縦割り」をどう乗り越えるのかの第一歩となった取り組みであったと位置づけることができるであろう。

さて、この歴みち調査の結果を受けて、さらに、本格的に都市計画道路変更へと舵を切るために、川越市は、「川越市歴史的地区整備に関する調査」（1989年度）の調査委員会を立ち上げることとなる。この調査は、歴史的景観地区の整備計画と、一番街通りおよびその周辺の街路修景計画を行うことを目的として行われたものであった²⁰。言うまでもなくこの調査も最終的に都市計画道路の縮小変更を見据えたものであるから、建設省の担当者の参画は是が非でも必要であった。そして、この委員会の立ち上げやそのための調整等において、佐々木氏がこれまでの歴みち事業等を通じて直接、仕事を共に行った学会や行政・建設省の様々な方々との人脈が貢献することとなる。

とりわけ、この調査の委員会において重要な役割を担われたのが、新谷洋二東京大学教授（当時）であった。新谷氏と佐々木氏とは、川越のこの調査の前にも既に、萩市での歴みち事業の委員会でも、委員長とコンサルタントというかたちで共に仕事をしていたそうである。今でこそ、公共政策の中で景観や風土を重視すべしとの考

え方はそれなりに公共事業関係者の中でも知られつつある状況にあるが、当時は公共事業の中で、それもとりわけ道路事業の中で歴史を重視するという考え方はほとんど世間的には浸透していないのが実情であった。そんな時代において、道路計画、都市計画の専門的な知識と見識を十分に持ち、しかも、歴史性を重視しながら道路の計画を変更することが必要であるということを主張できるような学識経験者は、極めて貴重な存在であったのである。しかも、全国のような都市計画を支援していた新谷氏は、建設省からの絶大な信頼を得ていた。その一方で、歴みち事業の実績を通して、文化庁側からの信頼も厚かったとのことである。こうした新谷氏の委員長就任によって、川越の都市計画決定の縮小変更がさらに前に一歩進むこととなったのである。

さらに、この委員会において重要な役割を担ったのが、建設省（当時）の松谷春敏氏であった。松谷氏は、当時、都市計画変更に関わる諸行政を所管する担当部局である都市計画課の課長補佐を担当されていた。そして松谷氏は、この委員会の「幹事長」を担当することとなった。こうした委員会の布陣をひくことで、「国レベルの都市計画行政側」としては、都市計画道路の縮小変更を検討する環境が実質的に整えられたのである。

ただし、この調査から簡単に伝建指定へと進められた訳ではなかった。この調査で提案された道路計画（俗称「へび玉道路」と呼ばれる、蔵の部分だけ幅員を狭く、それ以外は幅員を太くする、という道路計画）が、住民から大いに反発を受けてしまったらしい。「国レベルの都市計画行政側」の考え方と、住民との考え方の間に、一定の乖離が存在していたのであった。

しかしこの件をきっかけにして、この道路をどうすべきなのかの議論が、川越市の住民の間でも頻繁にされるようになり、住民の間でも、都市計画道路の縮小変更、そして、伝建指定に向けた機運が高まっていったらしい。そして、住民、川越市、埼玉県、建設省、文化庁というそれぞれの主体の間で様々な議論がなされ、調整が図られ、1999年、ようやく、「都市計画行政」における都市計画の縮小変更（1999年4月9日）と、「文化行政」における伝建指定（1999年12月1日）が決定されたのである（なお、このあたりの詳細は、新谷洋二編著「歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり」を参照されたい。

この様に、伝建地区指定、そしてそのための都市計画道路の縮小変更は、様々な人々、様々な主体がそれぞれ重要な役割を担うことではじめて実現されたものである。ただし、その中でも「国レベルの、都市計画行政と文化行政の間にある縦割りの壁」と「前例の無かった、都市計画道路の縮小変更を行うという障壁」は、とりわけ乗り越えることが困難な障害であったものと言えるだろう。

そんな壁は、住民や川越市の職員や文化行政に携わる専門家といった、川越まちづくりを支えてきた人々の力だけでは、乗り越えることは難しかったに違いない。そんな中で、佐々木氏は、川越のまちづくりの展開にあたって、「都市計画行政」についての豊富な知識、そして、歴みち事業を通じた文化行政の方々を含めた様々な人脈を持つ、外部のプロフェッショナルとして欠くべからざる重要な役割を担ったのだと言えるだろう。一つに、佐々木氏が都市計画行政における建設省の担当者や有識者、さらには、歴みち事業において協働した文化庁の担当者との間の橋渡し役となられたこと、二つに、都市計画行政のプロフェッショナルとして適切な知識を提供しえたことが、伝建地区指定に至った大きな鍵であったに違いないであろう。

こうした佐々木氏の川越での仕事は、まちづくりの表舞台というよりはむしろ、まちづくりを陰で支えた一専門家のそれと呼ぶに相応しいものであろう。まちづくりが実質的に展開していくにあたっては、柔軟で、時に新しい発想と仕事を手がけつつも、豊富な知識と見識を備えたこうした専門家の存在が、大きいに違いない。

5. 川越のまちづくりの解釈学的考察

以上、本稿では、川越における、伝建指定に至るまでのまちづくりに関わった四名の方々の実践を物語的に描写した。本章では、以上の物語描写をふまえて、まちづくりに資する解釈学的考察を行う。

(1) まちづくりに不可欠な町衆・行政・専門家の存在

まちづくりを進めるにあたって、様々な関係者が存在しているが、中でも、町衆、行政、専門家の存在が必要不可欠であることを、川越の物語描写の中で見て取ることができる。

町衆は、その町で生活している住民として、まちづくりの中心に位置しつつ、尽力していかなければ、まちづくりは進展しない。

そして、その町衆を支える行政が、地域と一体となって業務を進めていかなければ、都市という様々な、そして多大な影響を伴う問題を扱う上では、まちづくりは単なる住民活動の一部としかかなり得ない。その行政に携わる行政官が、町衆としての精神を持ちながら行動していくことが、川越のまちづくりを進展させた根幹であり、まちづくり全般にとって、大事な要素とも言えるだろう。

さらに、町並み保全の専門家である福川氏、都市計画や交通の専門家である佐々木氏という人々の助け無くして、権限を有する、あるいは法的に定められた、確固たるまちづくりの展開はあり得なかったであろう。また、

こうした専門家の存在が無ければ、どれだけ可児氏や植松氏が尽力したとしても、伝建地区や都市計画の変更は果たされなかったであろう。

この町衆、行政、専門家の存在が少なくとも不可欠であり、どの関係主体が欠けていても今のような町にはなっていないであろう。

(2) まちづくりにおける真面目なまでの専門性と地元への情念

そうした関係者の存在の重要性について考えると、専門家の存在の重要性、現場でのその専門性を活用する総合性、いずれも大事であると言えるだろう。こうした専門家として真面目に仕事をしていくことと同時に、地元の人間が、あくまでも地元に対してこだわりを持ち続けるという態度が大事である。つまり、まちにかける情念に基づくローカルなまちづくりと、知識に基づく非ローカルな専門性の双方が融合して初めて、具体的なまちづくりが進むであろう。

(3) 自発的ならびに機を見て敏なる行動

川越に関わった四人ともが皆、動くべき時に行動したということが言えるだろう。それは例えば、可児氏がコミュニティマート構想の存在を知り、事業を進めていったことや、植松氏が一番街通りの下水官工事の際に電線地中化を推し進めたこと、福川氏が作成した町づくり規範、そして佐々木氏が、川越市の行政官が町並み保存の相談をしに来た際に、伝建地区指定に向けた専門的なアドバイスをされたこと等である。

こうした行動をとらず、それぞれがなすべき事をなさず時が過ぎてしまったならば、まちづくりが動くことはなかったであろう。

重要なことは、鍵となる時点において行動しなかったとしても、誰もそれぞれの人々にペナルティを科すことなどできなかったであろうという点である。つまり、皆、強請されるまでもなく、自発的に、独立自尊の意志で、そうした仕事に赴いたのである。

もちろん、そうした機会はいつでも訪れるわけではなく、目的意識に基づく緊張感がなかったならば、機会が巡ってきた時に対応できないであろう。こうした意味で、いつでも動けるような体制に各人がなっていた、ということが重要であると考えられる。

こうした事を考え合わせると、多くの地域でまちづくりが進展していない状況にある中で、その地域に好機が訪れていないというのは、実際にそうなのではなくて、好機があっても見逃しているという事態が考えられ、それが最大の問題になっていると言えるのではないだろうか。そして、そのためには、専門家は専門家としての、地元の人々は地元と運命を共にするくらいの気迫があっ

て初めて、まちづくりが動いていくものと思われる。

(4) まちづくりを成功に導く謙虚かつ毅然とした態度

専門家として真面目に仕事を行っていくこと、地元にごだわる情念と、機を見て敏なる態度...はいずれも重要であるが、それを導くのは、おそらくは、「謙虚さ」なのである。

まちづくりのリーダー的存在の可児氏が、もしも誰の意見も聞かない傲慢な人物であったなら、蔵の会も町並み委員会も成立しなかっただろう。植松氏が傲慢であったら、町並み保存に行き詰まった時に文化庁の担当官や、専門家の佐々木氏に尋ねにいかなかったであろう。福川氏が傲慢であったら、あししげく川越に通わずにデザインコードを自らが信ずる理論だけに基づいてつくったであろう。佐々木氏が傲慢であったら、委員会の陰の調整役を黙々と続けることができなかったであろう。

しかしその一方で、毅然とした態度もなく、ただ、へりくだり、ともすれば卑屈な態度だけでは、まちづくりは進まなかっただろう。

可児氏が卑屈であれば、まちづくりの信念を持つリーダーたり得ることなどありえなかっただろう。植松氏が、自分には何もできないと感ずる卑屈なものであったのなら、人にものを尋ねることすらしなかったに違いない。福川氏にしても佐々木氏にしても、毅然とした態度がなければ、問われたときに専門的なアドバイスを何もすることはなかったであろう。

すなわち、ここの登場した人は皆、謙虚さをたもちながら、毅然とした態度を携えていたのである。そうした卑屈ならざる謙虚さと、傲慢ならざる毅然さを兼ね備えた人物こそが、川越まちづくりの展開という大きな物語に大いに貢献しうる機会に預かることができたのである。

この様に、川越まちづくりに実質的に大いなる貢献を果たした人々はいずれも、まちづくりという大きな物語の中で、自分自身ができること、できないことを過不足無く、謙虚かつ毅然と理解し、その役割を遂行したのであり、しかも、そうした役割を、機を見て敏に、自ら進んで、買って出たのである。こうみると、行政や非行政、川越内部や外部といった違いはあれど、皆、真剣に自らがなすべき役割を、あるいはさらに言うなら、自らしかやりえぬ役割を、進んで引き受けた人々なのだということができるだろう。そう考えるなら、まちづくりを成功させるには、オルテガの言うような「大衆」ならざる、自ら責務の中にうってでる「精神の貴族」が不可欠なのであると思われるのである。

それはおそらくは、川越のような「蔵」というような目に見える歴史資産があるがなかるうが、関係のないことなのだろうと思う。そう考えるなら、川越が成功したのは、蔵があったからではないとすらいえるだろう。

蔵を残そうと考えた「精神の貴族」があつてはじめて、そのまちづくりが展開したと言いうるだろう。

だとするならば、そんなまちづくりは、蔵があろうがなかろうが、歴史遺産があろうがなかろうが、「人間」がいるかぎり、どんな土地でも展開できるはずなのだろう。なぜなら、どんな状況にあろうとも、人間は自ら進んで責任を負おうとする精神の貴族になることもできる一方で、そうしない大衆にもなれるからである。

謝辞：インタビューをお引き受け頂きました可児一男氏、植松久生氏、福川裕一氏、佐々木政雄氏の各氏より、これまでのご経験について大変熱心にご教示頂きました。各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意を表します。

脚注

[1] もちろん、異なる時刻において異なる物語の中を生きることはできるのであり、その意味において様々な解釈を「比較」することを通じて、より高次の一般的解釈を得ることが可能となる（例えば、羽鳥・藤井，2010など）。しかし、本文で論じているように、解釈学的方法にて一般的了解を得ようとするには、自然科学的アプローチのように複数データを“同時”に分析することは原理的にできないのである。

参考文献

- 1) Bruner, J: 'Life as narrative', *Social Reserch* 54-1, 1987.
- 2) Bruner, J (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 訳) : 意味の復権 フォークサイコロジーに向けて, ミネルヴァ書房, 1999.
- 3) Bruner, J (田中一彦訳) : 可能世界の心理, みすず書房, 1998.

- 4) ディルタイ (著) 久野昭 (訳) : 解釈学の成立, 以文社, 1981.
- 5) E, Mankowski. & J, Rappaport: Stories, Identity, and the Psychological Sense of Community, Knowledge and Memory: The Real Story, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 211-226, 1995.
- 6) Peggy J. Miller: 'Personal Storytelling In Every Life: Social and Cultural Perspectives', Robert S (eds.), KNOWLEDGE AND MEMORY: The Real Story, Lawrence Erlbaum Assoc Inc. 1995
- 7) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラルヒストリー, 水曜社, 2005.
- 8) 服部敏也: PRI Review No.36 オーラルヒストリーの勧め, 国土交通省国土交通政策研究所, 2010.
- 9) 山下裕作: 実践の民俗学, 農村漁村文化協会, 2008.
- 10) Esplanade No.50 住民の主体性を取り込んだまちづくり 埼玉県川越市, INAX, 1999.
- 11) 川越市: 川越市入込観光客数, 2010.
- 12) 藤井聡: 景観改善の「物語」とその「伝染」について, 都市計画, 57(6), pp.21-24, 2008.
- 13) 浅野智彦: 自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ, 頸草書房, 2001.
- 14) 鎌田薫, 福川裕一 (研究者) : NIRA 研究叢書 実践的「まちづくり規範」の研究・川越の試み, (株)地区計画コンサルタンツ, 1988.
- 15) 財団法人環境文化研究所: 川越の町並みとデザインコード, 1981.
- 16) 町並み委員会: 川越一番街町づくり規範, 1988.
- 17) 新谷洋二 (編著) : 歴史を未来につなぐまちづくり・まちづくり, 学芸出版社, 2006.
- 18) 文化庁: 文化財保護法, 第九章 伝統的建造物群保存地区 第百四十二条~第百四十四条, 最終改正 2007年3月30日 法律第七号
- 19) 川越市: 川越市歴史的地区環境整備街路事業調査報告書, 1986.
- 20) 川越市: 川越市歴史的地区整備に関する調査報告書, 1990

(? . ? . ? 受付)

DESCRIPTION OF NARRATIVES ON “KAWAGOE CITY PLANNING”: HISTORY OF CITY PLANNING TO DESIGNATION OF THE PRESERVATION DISTRICT

Takanori SAWASAKI, Satoshi FUJII, Tsuyoshi HATORI and Daiki HASEGAWA

Recently, there are problems to be lifeless on the centre of a city. On the other hand there is a case to regain the vigor of the city. It is helpful in city planning in the future to pay attention to such a success case and to obtain a general knowledge of how the success is led.

As the method of getting the knowledge, it is common so far to use “Natural scientific methodology” what is the unspiritual quantitative analysis. However, the author applies “Hermeneutic methodology” what is the analysis of interpreting “Narrative” to understand the thought of people who are related to the city planning.

In this research, the author first interviews various concerned about the city planning in Kawagoe City, Saitama Prefecture, where it is said that a success case of city planning, and constructs a “Narrative” through this interviews. As it is interpreted, the factor that lead success to “the Kawagoe city planning” seems to be explained.